Mac Fan
特別編集

ビジネスを成功に導くための
コンピュータ選びと活用法

企業のための Macガイド



INTRODUCTION

「ビジネスは絶対Windows」、そんな誤解をしていませんか？ Macの導入は企業にさまざまなメリットをもたらします！

現在、Macを導入する企業がどんどん増えています。「えっ、仕事にMac」と驚く人がいるかもしれませんが、今のMacはビジネスの現場においてさまざまな面でWindows PCよりも優れたパフォーマンスを発揮します。もし未だに「Macはビジネスに向かない」と思っているならば、そうした勘違いを今すぐ払拭しましょう。これから解説する「なぜビジネスにMacが最適なのか」の10の理由、そしてMac導入企業の事例を知れば、あなたの企業でもきっとMacを導入したくなるはずです。

Macがビジネスに適している10の理由

1 Lineup

Macはラインアップがシンプルで機種選定がしやすいため、比較検討に労力がかかりません。端末のリプレースや故障時にも交換しやすく、ユーザの使い勝手も変わりません。

» 3P

2 Performance

Appleシリコンを搭載したMacは、かつてないほど高性能でバッテリも長持ち。同等スペックのWindows PCと比較しても動作は軽快で、AI処理も高速にこなします。

» 4P

3 Cost

「Macは高価」は幻想です。Macの端末価格は「AI PC」と呼ばれるWindows PCとほとんど変わりません。また、「総所有コスト」で見ればMacのほうが実は安価です。

» 5P

4 Engagement

「従業員選択制」を導入してMacも使えるようにすれば、従業員の生産性や満足度、ロイヤリティが向上します。人材の定着化や優秀な人材獲得にもつながります。

» 6P

5 Continuity

Apple製品はデバイス間の連係に優れます。MacとiPhone／iPadを連係させれば、より素早くタスクを片づけることが可能。従業員のパフォーマンスがさらに高まります。

» 7P

6 Security

MacそしてmacOSには、強固なセキュリティ機能が搭載されています。Windows PCと比較してセキュリティリスクが低く、データ侵害が削減された例もあります。

» 10P

7 Apps

Macの標準アプリはビジネスにも威力を発揮し、App Storeには仕事のためのアプリが豊富に存在します。そもそもクラウドサービスならプラットフォーム問わず使えます。

» 11P

8 Windows

もしMac非対応のアプリがあっても、MacではWindows OSも動きます。MicrosoftがAppleシリコン搭載MacでWindows 11を実行する方法を認定・紹介しています。

» 12P

9 Service

AppleはIT管理者が効率的にMacを企業導入するためのソリューションを用意しています。Windows PCとの混在環境でも「ゼロトラスト」をしっかり構築できます。

» 26P

10 AI

AppleのAI機能「Apple Intelligence」が日本語環境にも対応。普段の業務で自然に使えるから仕事がもっと捗ります。セキュリティとプライバシーの高さも強みです。

» 29P

Mac導入企業インタビュー

❶株式会社ヨックモックホールディングス » 8P
❷ソフトバンクロボティクス株式会社» 30P

本冊子は『Mac Fan 2025年7月号』の特集記事抜き刷りです。
記事の無断転載・転用・複写を禁じます
株式会社マイナビ出版 Mac Fan編集部

Macを選ぶ理由❶ Lineup

Macはラインアップがシンプル、機種選定がしやすい。



ノートブックならAirかProか、たったそれだけ!

全機種が業務利用に最適

業務用パソコンを企業導入する際、IT担当者にとって悩みの種となるのが機種選定です。統一したスペックのものを一括導入できるなら負担は少なくなりますが、たいていの場合は社内業務を洗い出して部署ごとに最適なモデルを、時には複数のメーカーから選定する必要があるでしょう。たくさんのメーカーから多種多様なモデルがリリースされているウィンドウズPCの場合、スペックや使いやすさ、コストなどさまざまな項目を比較検討して選び出すには労力がかかりがちです。

一方のMacはアップル社からしかリリースされておらず、ラインアップがシンプル、かつすべてのモデルが業務利用に十分な性能を備えるため、機種選定しやすいのがメリットです。現在リリースされているのは、MacBookエア、MacBookプロ、iMac、Macミニ、Macスタジオ、Macプロの6機種。今はリモートワークや働き方の多様化に対応するためにノートブックを貸与することが主流なので、「MacBookエアか、MacBookプロか」をまずは判断し、そのうえでスペックやコストに応じてモデル（MacBookエアには13インチ3モデル／15インチ3モデル、MacBookプロには14インチ6モデル、16インチ4モデル）を絞り込んでいけばいいのです。

変わらない使用感

こうした機種選定のしやすさは、端末調達時だけでなく、リプレース時にもメリットをもたらします。以前の選定機種で問題がなければ、ベンダーや機種選びに時間をかけることなく、最新型を購入すれば済むからです。

また、端末リプレース時にユーザの使い勝手が大きく変わらない点もMacの大きな魅力です。ウィンドウズPCはベンダーやモデルによって使い方が大きく変わることがありますが、Macはたとえ最新型を導入しても、別のモデルに変更したとしてもユーザビリティが一貫しているため、従業員に余計な学習コストを生じさせません。端末のリプレースや万が一の故障時に代替機を渡しても、ユーザが迷わずに使えることは、業務の生産性の面で大きな価値をもたらします。

デスクトップ

iMac

19万8800円〜



ノートブック

MacBook Pro

14インチ:24万8800円〜
16インチ:39万8800円〜



MacBook Air

13インチ:16万4800円〜
15インチ:19万8800円〜



実際にMacを導入する企業のほとんどは、一般職向けにはもっとも安価な13インチMacBook Air（画面サイズを重視する場合は15インチ）、クリエイティブ職向けにはCPUやGPU、メモリの性能がより優れた14インチまたは16インチのMacBook Pro（必要に応じてメモリ量等をカスタマイズ）、デスクトップを希望する場合は、ディスプレイ一体型のiMac（4モデル）を選ぶ傾向にあります。ディスプレイが付属されないMac mini、ワークステーション並みの処理性能を備えたMac StudioやMac Proは、一般的な企業では一部の限られた用途向けです。



クリエイティブ職向けに、あえて持ち運びしやすい14インチMacBook Proを選択し、会社では外付けディスプレイに接続してデュアルディスプレイを利用している企業もあります。



MacBook AirやMac Book Pro、iMacは、ほぼ毎年または1年おきに同じ名称で新モデルが発売されます。仕様がアップデートされたとしても、全体的な使い勝手が変わることはなく、リプレースの際もスムースに使い始められます。

Macを選ぶ理由❷ Performance

Windows PCよりサクサク動く。AI PCにも最適!



Appleシリコンの脅威のパワーとバッテリ性能

性能と電力効率を両立

Macを企業導入する最大の魅力と言っても過言ではないのが、「アップル（Apple）シリコン」の高いパフォーマンスです。2020年のM1チップ発表時はインテル製CPUを搭載したMacと比較してCPUは最大3.5倍高速、GPUは最大6倍高速、機械学習（ML）機能は最大15倍高速という脅威の性能が大きな話題になりました（当時最新のウィンドウズのノートブックPCと比較した際のCPUパフォーマンスは2倍）。最大10コアのCPUとGPUを採用し、最大32GBのユニファイドメモリに対応する最新のM4チップではさらに性能が向上し、M4搭載MacBookエアはM1モデルよりも最大2倍高速です（最速のインテルベースのMacBookエアと比較した場合は最大23倍高速）。

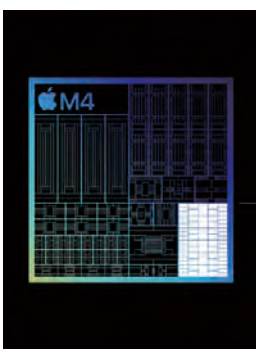
この最先端のパフォーマンスを発揮するMシリーズはMacのシステムに最適化されており、業務利用においても実にスピーディな動作とマルチタスクを実現します。実際にMacを導入した企業に話を聞くと、アプリの起動時間やレスポンス、ビデオ会議しながらの作業、重たいスプレッドシートを開くときなど日常業務のさまざまなタスクにおいて、スペックが同等のウィンドウズPCよりも軽快に動作し、業務効率が高まったという声が上がります。

また、優れた電力効率もアップルシリコンならではの大きな特徴です。M4チップを搭載したMacBookエアは、最大18時間（ビデオストリーミング）のバッテリ駆動時間を実現。外出の多い営業職はもちろん、リモートワークする際も電源コンセントのある場所を探したり、電源アダプタを持ち歩いたりすることなく、1日中作業できます。

AIや機械学習にも最適

さらに、アップルシリコン搭載Macは「オンデバイスでの高速な機械学習」を念頭に置いて設計されている点も重要なポイントです。チップ内には機械学習の演算処理に特化した「ニューラル・エンジン（Neural Engine）」が搭載され、M4チップでは毎秒38兆回という驚異的な演算処理を実現しています。これはA11バイオニック（2017年のiPhone 8等に搭載）に搭載された初のニューラル・エンジンと比べて60倍高速、M1チップ（毎秒11兆回）と比べて約3.5倍高速です。また、チップ内にはMLアクセラレータが設けられ、高性能GPUや高い帯域幅のユニファイドメモリと連係して、大規模言語モデル（LLM）やAI機能の処理に優れたパフォーマンスを発揮します。

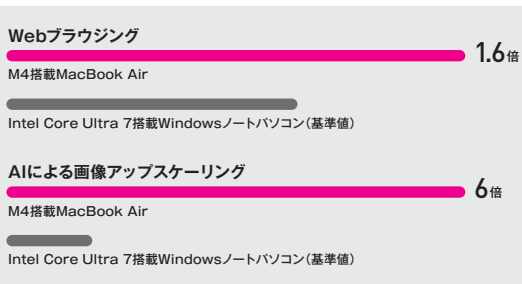
AIの処理をローカルで行う「AI対応PC」がビジネスの現場でも主流になることが予想される中、AIのためのパワフルなチップを搭載したMacは、その筆頭に位置づけられるのです。



Appleは、2020年後期に発売されたMacの一部モデルから、Intel製プロセッサを自社設計の「Appleシリコン」へ移行開始。現在はすべてのMacに搭載されています。Mac向けのAppleシリコンの名称には「M」が冠され、2020年に登場した初代M1を経て、現在は第4世代目のM4がリリースされています。



Macは熱効率や排熱に優れているので高負荷時でも本体が熱くなったり、ファン（MacBook Airには非搭載）が回ったりしてうるさく感じることがありません。Windows PCと比較した際はこうしたポイントもユーザ体験の違いをもたらします。

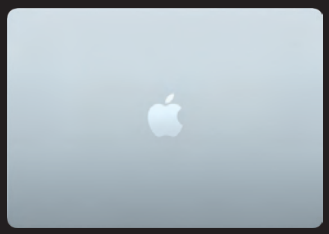


Appleの発表によると、M4チップを搭載したMacBook Airは、NPU（Neural Processing Unit）搭載のIntel製ハイエンドプロセッサ「Intel Core Ultra 7」搭載のWindowsノートパソコンと比べて、Webブラウジングが最大60%高速、より負荷の高いタスクではパフォーマンスが最大2倍高速です。また、AIを利用した画像のアップスケーリングは6倍高速です。

URL https://www.apple.com/jp/newsroom/2025/03/apple-introduces-the-new-macbook-air-with-the-m4-chip-and-a-sky-blue-color/

Macを選ぶ理由❸ Cost

総所有コストはWindows PCより安価。残存価値が高い。



長く使える設計だから未来の投資へつながる

「Macは高価」という幻想

端末価格は業務用パソコンを選定する際の重要なファクタです。事務作業向けのノートブックの相場は10～15万円とされますが、ハードウェア構成の異なる多種多様な機種がリリースされているウィンドウズPCの場合、利用頻度やスペック次第ではより安価に購入できます。その一方で、MacBookエアの価格は16万4800円からとなっており、この点だけを見れば初期導入コストは一見高くなるようにも思えます。

しかし、端末の選定は企業のIT投資に対するスタンスに大きく左右されます。特に近年は在宅勤務やDX推進によって法人向けパソコンの高性能化かつ薄くて軽いポータブル化が進んでおり、「AIPC」と呼ばれるジャンルではウィンドウズPCでも15万円を超える機種が存在します。実際にウィンドウズPCとMacを導入する企業に話を聞くと、同じスペックで揃えるなら「ウィンドウズPCもMacも変わらない、ほぼ同じ」という答えが返ってくることがほとんどです。

こうした企業に共通しているのは、従業員が最大のパフォーマンスを発揮できる環境をできる限り提供しようという考え方です。従業員の業務内容や経営層の考え方などに左右されるため一概に安価な端末が悪いとは言えませんが、今の時代は多くの企業にとって端末コストがMac導入の障壁にはなりません。

TCOではMacが優位

また本来、業務用パソコンの導入は端末（ハードウェア）の価格だけで判断すべきではなく、OSやソフトウェア、周辺機器、サービス、運用・保守・サポートなどを含めた「総所有コスト（TCO）」で考えることが重要です。そしてこの観点から比較すると、実はMacのほうが安価であるという調査結果が公表されています。たとえばフォレスター（Forrester Consulting）社が2024年に発表した調査によると、Macを5年間使用した際は1台あたり547ドル（8万3000円）削減可能だったそうです。特にMacはウィンドウズPCと比べて「残存価値」が高く、リセールバリューが高い点が大きな要因となっています。

	MacBook Air	Surface Laptop（第7世代）	Acer Swift Go 14	Dell Inspiron 13	Dell Inspiron 13	ThinkBook 13x Gen 4	HP Envy x360 14-fc
チップ	M4	Snapdragon X Plus	インテル Core Ultra 7 プロセッサー 155H	インテル Core Ultra 7 プロセッサー 155H	インテル Core Ultra 5 125H	インテル Core Ultra 5 125H	インテル Core Ultra 7 プロセッサー 155U
ディスプレイ	13インチ	13.8インチ	14インチ	13.3インチ	13.3インチ	13.5インチ	14インチ
CPU	10コア	10コア	16コア	16コア	14コア	14コア	12コア
GPU	8コア		8コア	8コア	7コア	7コア	4コア
メモリ	16GB	16GB	32GB	16GB	16GB	16GB	16GB
ストレージ	256GB SSD	256GB SSD	512GB SSD	1TB SSD	512GB SSD	1TB SSD	512GB SSD
価格	16万4800円	20万7680円	19万5999円（Acer公式オンラインストア価格）	16万7654円（Dell公式ストア価格）	12万2386円（Dell公式ストア価格）	16万4890円（Lenovoストア価格）	16万2800円（ダイレクト価格）／24万3100円（HP希望販売価格）

Windows PCにもNPUを搭載したAIパソコン（AI PC）が登場しています。M4チップを搭載したMacBook Airと同じ13インチ程度のものを比較したところ、MacBook Airが決して高くはないことがわかります。

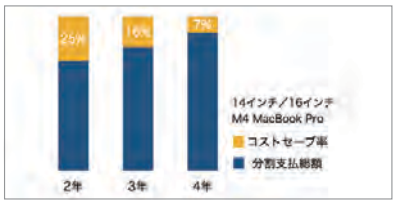
MacのTCOに関しては、Forrester Consulting社が詳しい調査レポート「The Total Economic Impact Of Mac In Enterprise」を公開しています。Macを5年間導入したときのサポート&運用コストは約3分の1、また4年間使用後の端末の残存価値はWindows PCの3倍と記載されています。

URL https://tei.forrester.com/go/apple/tei/?lang=ja-jp



購入時の総支払額を下げる「Apple Financial Services」

Mac導入時は、リース返却時の残価価値を差し引いた金額で購入できる「Apple Financial Services：AFS」を利用して総支払費用を抑えられます。AFSは1～4年の中短期でリース期間と使いたいデバイスを選択できるため、数年周期で最新モデルへ入れ替える際のライフサイクル管理が簡単になります。また、デバイスの資産管理や廃棄などにかかる実務をなくすことができ、デバイス返却後はAppleによって再利用やリサイクルが行われる点も魅力です。



URL https://www.apple.com/jp/financing/

Macを選ぶ理由❹ Engagement

従業員の生産性や満足度が向上! 人材採用にも効果あり。



「従業員選択制」採用でMacを導入する企業が増加

仕事もMacでしたい!

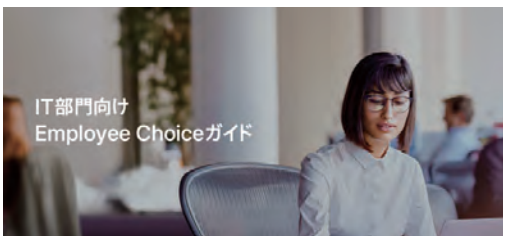
企業でMacを導入する理由として忘れてはならないのが、業務用パソコンの「従業員選択制」(Employee Choice:従業員自らが使いたいデバイスを選択できる制度)の広がりです。「ビジネスではウィンドウズ」が当たり前だった頃は、入社時にウィンドウズPCを貸与されることが普通だったかもしれませんが、そうした慣習も今は時代遅れになりつつあります。なぜなら、従業員が使い慣れたデバイスを利用できれば、業務の効率化や生産性の向上につながるからです。

この従業員選択制が大きく注目されることになったのは、世界的なIT企業であるIBMが2015年に採用したことがきっかけです。Macを選択肢に加えたことでウィンドウズPCからの移行が増え、従業員の生産性や満足度の向上などにつながったという調査結果を発表しました。Macユーザ1人当たりの生産性が5%向上したというフォレスター社のレポート(The Total Economic Impact Of Mac In Enterprise: M1 Update)」もあります。

企業の成長につながる

また、従業員選択制を導入してMacを利用可能にすることは、従業員の定着率の向上や、慣れたデバイスを使うことで問い合わせの頻度が下り、サポートコストの低下が見込めるというメリットもあります。

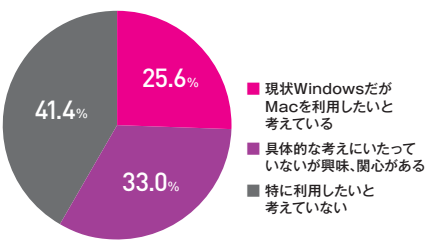
さらに近年は、学生時代や前職で利用していて引き続きMacで仕事をしたいと希望する人が増加傾向にあります。そのため、「Macを選べるようにすること」は従業員が働きやすい環境に投資していること、従業員の多様性を大切にしていることを印象づけるとともに、企業の成長につながる人材獲得の面で大きな効果を発揮するでしょう。



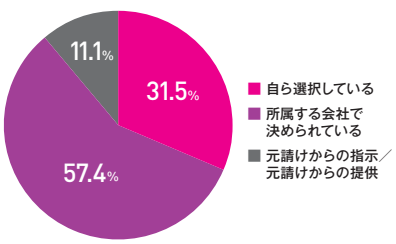
Appleが公開する「IT部門向けEmployee Choiceガイド」では、従業員選択制のメリットや開始方法が詳しく説明されています。
URL https://www.apple.com/jp/business/site/docs/resources/Employee_Choice_Guide_OriginalJan18_DEC2019_JP.pdf

Macは福利厚生にも寄与できる

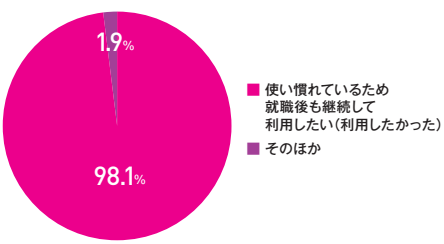
従業員選択制の採用と併せて、入社時に貸与されたMacをリプレースする際に、これまで利用していた端末を「返却するか、購入時よりも安価の価格で買い取るか」を従業員に選択してもらうプログラムを実施している企業もあります。Macは3~4年経っても最新OSを利用することができ、日常利用に十分な性能を備えます。そのため、たとえば家庭用や子ども用のパソコンとして使い続けることが可能です。従業員の働き方を変革するための従業員選択制に加えて、このようなプログラムを展開すれば従業員の福利厚生につなげることができ、端末を長く大事に使ってもらえるようになるでしょう。



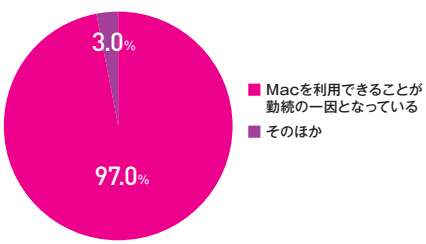
Windows PC利用ユーザ(n=782)に対してMacの利用意向を尋ねたアンケートでは約58.6%がMacに関心があると回答。従業員数101名~1000名の中堅企業においてMacの利用意向が高くなっています。



2022年に株式会社富士キメラ総研が行った調査によると、IT企業と事業会社(非IT企業)(n=1046)において業務用パソコンを「自ら選択している」と答えた人の割合は約31.5%となっています。



就職活動時や就職活動後のMacの利用意向を尋ねたアンケートでは、学生時代にMacを利用していた学生(n=156)のうち98.1%が就職時にも「継続して使い続けたい(利用したかった)」と答えています。



現在Macを利用している人(n=201)の中で、「Macを利用できることが勤続の一因となっている」と答えた人の割合は97.0%。Macを使えることが仕事を行ううえでのモチベーションの一端となっていることが窺えます。

Macを選ぶ理由❺ Continuity

iPhoneやiPadと連係するから素早くタスクが行える。



シームレスにつながる連係機能がApple製品の魅力

より多くのことを簡単に

業務用スマートフォンやタブレットとしてiPhoneやiPadを採用している場合、Macの導入は従業員のさらなる生産性向上に寄与します。アップル製品には強力な連係機能が搭載されているため、MacとiPhone／iPadを一緒に利用することでデバイス間をシームレスに移動しながらスマートに作業できるようになるからです。

たとえば、作業を別のデバイスに自動的に引き継げる「ハンドオフ（Handoff）」を使えば、iPhoneで書き始めたメールをMacで仕上げたり、Macで見ているWebサイトをiPadで閲覧したりすることが可能です。iPhoneに引き継ぐ場合はAppスイッチャーに表示されるアイコンをタップするだけで済み、いちいちファイルを探す必要はありません。

また、「ユニバーサルクリップボード」もビジネスの現場で非常に役立つ機能です。iPhoneやiPad上で画像や動画、テキストをコピーし、近くにあるMac上でペーストすればデバイス間のコピー&ペーストが簡単に行えます。Wi-Fiネットワークに接続していなくてもデバイス間でファイル共有を行うことができる「エアドロップ（AirDrop）」も同僚と書類を共有したり、打ち合わせで訪れたクライアントに情報を送りたいときに便利です。

連係機能は制限可能

そのほか、iPhoneにかかってきた電話をMacで受け取ったり、iPhoneをWebカメラとして利用したり、iPhoneやiPadでスキャンした写真やスケッチをMacに自動的に取り込んだり、iPhoneのインターネット共有を利用してMacをネットワークに接続したりなど、アップル製品同士の連係機能は豊富に存在します。プライベートでMacを利用している人なら、その利便性を仕事でも享受したいと考えるのは当然です。

ただし、セキュリティ面で、こうした連係機能を従業員に自由に利用させたくない企業もあるでしょう。その場合は、アップル製品に対応したモバイルデバイス管理（MDM）ソリューションを利用することで、特定の機能の利用を制限することが可能です。

Mac／iPhone／iPadの主な連係機能



MacをiPhone、iPadと連係させればそれぞれのデバイスがシームレスにつながり、業務の効率化を実現できます。MacとiPhone、iPadの連係機能に関しては、Appleが公開するドキュメント「Apple製デバイスの連係機能と必要条件」に詳しく記載されています。

🔲 https://support.apple.com/ja-jp/108046

ユニバーサルクリップボード

1台のデバイスでコピーした内容を別のデバイスでペーストできます。



Instant Hotspot

iPhoneやiPad（Wi-Fi ＋ Cellular）のインターネット回線を利用してMacをネットワーク接続することができます。

Handoff

作業を中断したところから別のデバイスでスムースに作業を続けられます。



連係スケッチと連係マークアップ

iPhoneやiPadでスケッチしたり、マークアップを追加したりすると、Macへリアルタイムに反映されます。



AirDrop

書類や写真、ビデオ、Webサイト、位置情報などをワイヤレスで送信できます。

iPhoneミラーリング

Macのデスクトップ上にiPhoneの画面を表示して、iPhoneのアプリや通知を操作できます。ドラッグ&ドロップでファイルをコピーすることも可能です。



連係カメラ

iPhoneをMacのWebカメラとして使うことができます。iPhoneまたはiPadを使ってMacで写真を撮る／書類をスキャンすることも可能です。



INTERVIEW

Windowsだけだった環境に“Macを選ぶ自由”を！ ヨックモック流・現場主導の業務デバイス改革

洋菓子ギフトの人気ランキングで常に上位に入る「シガール」で知られる株式会社ヨックモックホールディングスは、2024年4月より、業務用デバイスの選択肢として新たにMacを採用しました。Mac導入に至った背景や準備・運用の工夫、そしてMacを選んだ社員の反応について、同社の情報システムを担当する八重澤哲也さん、佐藤尚也さん、三輪義人さんにお話を伺いました。



株式会社ヨックモックホールディングス
情報システム部 部長 八重澤哲也さん（左）
情報システム部 情報システムグループ グループ長 佐藤尚也さん（中）
情報システム部 情報システムグループ 主任 三輪義人さん（右）

社員の1割がMacを希望

MF●Macを導入される前の社内のPC環境について教えてください。

八重澤●弊社ではもともとウィンドウズ環境で統一して端末を管理しており、7カ所の拠点に合計約400台のPCを貸与していました。これは大量仕入れによるコスト削減や、管理の効率化を目的としたものです。例外的に、外部のデザイナーとのやりとりなどで1～2台のMacを個別に用意することはありましたが、基本的にはMacは圧倒的な少数派でした。

MF●Mac導入に至ったきっかけは何でしょうか？

八重澤●iPhoneやiPadの普及により、プライベートでもMacを使用する社員が増えてきました。また、弊社では中途採用を積極的に行っており、マーケティングや商品企画に携わる社員の中には、前職でMacを使っていた人も多くいます。Mac導入は誰かが音頭を取ったというより、「Macで仕事がしたい」という声が社内で自然と高まってきた、というのが実情です。さらに、コロナ禍を契機にリモートワークやWeb会議を推進することになり、社内ネットワーク環境を見直し、「マイクロソフト365（Microsoft 365）」を導入したことも追い風となりました。これにより、Macでも業務をスムースに進められる環境が整ったのです。

MF●Mac導入が決定したタイミングはいつ頃ですか。

八重澤●弊社では3～4年ごとに全社のPCを一括で入れ替えており、2020年の更新時には、ウィンドウズノートPCを3モデルから選べる制度を導入しました。この制度が非常に好評だったこともあり、2024年4月の更新時にMacを選択肢に加えました。

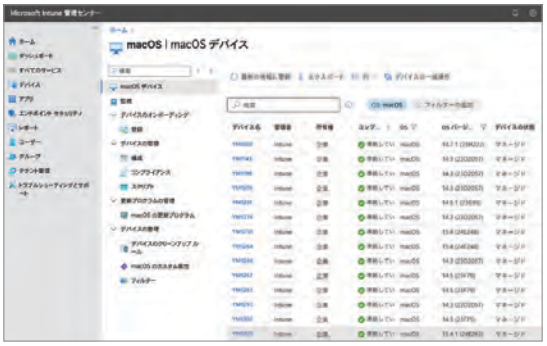
MF●導入したMacのモデルを教えてください。



株式会社ヨックモックホールディングス

「ヨックモック」は1969年創業の日本の洋菓子ブランドで、全国の有名百貨店を中心に約168店舗を展開しています。2009年には、株式会社ヨックモックホールディングスを持株会社とする新体制を発足し、製造工場の運営や東京・青山本店に併設されたカフェなど、ブランドの多角的な展開を進めています。

https://www.yokumoku.co.jp





従業員が選択できるデバイスに加わったMacBook Air。本体カラーは事前アンケートで人気のあったシルバーとなりましたが、「今後Macの希望者が増えればカラーの選択も検討したい」と八重澤さん。

Microsoftが提供するクラウドベースのデバイス管理サービス「Microsoft Intune」の導入により、Macのデバイス管理とセキュリティをWindowsと同等のレベルで管理できる体制を整備できました。

佐藤●M3チップ搭載のMacBookエアです。メモリはMac・ウィンドウズともに16GB、ストレージは基本的に256GBとしています。特にアドビ製品などのクリエイティブ系ソフトを使用する社員からは、Macが好評でした。

MF●Macを希望した社員はどのくらいいたのですか？

八重澤●初の試みだったこともあり、Macを希望したのは全体の1割強で、最終的に約20人に貸与しました。ただ、会計システムなどMacに対応していない業務アプリもあり、やむを得ずウィンドウズPCを選んだ社員もいます。また、「利用に興味はある」という人も多かったため、潜在的なニーズはもっとあると感じています。

初導入は期待と不安

MF●Mac導入のノウハウが少ない中で、キッティングなどの準備はどのように進められたのでしょうか？

佐藤●アップル製品に強いベンダーにご協力いただき、Mac導入専用のPoC（概念実証）プログラムに沿って準備を進めました。ベンダーから資料の提供も受け、それを参考にしながら社内で試行錯誤し、都度相談を重ねながら現在の運用体制にたどり着いたという流れです。

MF●これまでのウィンドウズPCの運用と比べて、異なる点はありましたか？

三輪●ウィンドウズではアクティブ・ディレクトリ（Active Directory）やグループポリシーを使えば一括管理が容易でしたが、Macに関してはその仕組み自体が私たちにとっては未知の領域でした。ただ今回は、社用iPhoneの管理でも使用しているMDM（モバイルデバイス管理）の「マイクロソフト・インチューン（Microsoft Intune）」を活用し、スムースに構成プロファイルの配付ができました。認証については、アクティブ・ディレクトリに参加させるのではなく、「ケルベロス（Kerberos）シングルサインオン機能拡張」を利用する方法を教えていただき、これまでの管理ノウハウを活かした形でMacを導入できました。

MF●ABM（Apple Business Manager）は活用されていますか？

八重澤●現時点ではMacの台数がまだ少ないため、ABMをフル活用しているとは言えません。しかし、販売店経由でシリアル番号を登録するだけで自動的にインチューンに接続される仕組みはとても便利でした。Macは〝個人向け〟というイメージが強かったのですが、企業向けの管理体制がここまで整っているのは驚きでした。

Macを〝特別扱いしない〟

MF●運用後に、社員からの問い合わせや想定外のトラブルなどはありましたか？

佐藤●最初は心配していましたが、問い合わせは予想よりも少なかったですね。基本的にMacに慣れている人が選んだこともあり、使い方の質問はほぼありませんでした。

三輪●〝Macを特別扱いしない〟という方針で導入を進めてきましたが、今のところ導入台数が少ないこともあって現状の管理ツールや体制で十分対応できています。また、実際にユーザ視点でも驚くくらい〝普通に使えるな〟というのがMacに対する率直な感想です。バッテリの持ちもよく、トラックパッドも使いやすいのでマウスを持ち歩く必要も感じません。

MF●ここまでのMac導入の成果や今後の活用について教えてください。

八重澤●デザイン業務に関わる社員からMacを歓迎する声を聞きますし、人事担当者からは採用活動でもMacを選べることがアピールポイントになっていると聞きました。こうした社員の生の声がほかの部署にも広がることで、今後Macを選ぶ社員が増えてくるかもしれません。今はまだ〝小規模だからこそできる運用〟ですが、スケールアップする際にはより高度なMDMの導入など、環境整備を改めて考えていきたいです。

Mac を選ぶ理由❻ Security

最先端のセキュリティ機能を搭載するから安全に使える。



インシデントやデータ侵害を減らしてセキュリティ強化

充実のセキュリティ機能

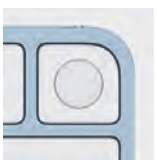
アップルはセキュリティとプライバシーを非常に重視してMacを設計しています。まずハードウェアレベルでは、アップルシリコンには世界トップクラスのシリコン設計チームが10年以上にわたり設計・改良を重ねたセキュリティ機能を搭載（カーネル整合性保護や高速許可制限、システムコプロセッサ整合性保護、ポインタ認証コード等）。また、「セキュアブート」を実現するためのブートROMや、ストレージの暗号化処理を行うAESエンジン、そして「セキュア・エンクレーブ（Secure Enclave）」と呼ばれるコンポーネントも搭載しています。中でもメインプロセッサから隔離されたセキュリティサブシステムを搭載するセキュア・エンクレーブはSoCと同じ設計原則で開発され、独自のBoot ROMとAESエンジン、メモリ保護エンジンを搭載し、生体認証であるタッチID（Touch ID）やフェイスID（Face ID）などの個人情報を保護・管理するために利用されます。

次に、システムレベルではブート時にシステムをマルウェア感染から保護する「セキュアブート」や実行時の悪質な改ざんを防止してアップルから提供された正規のソフトウェアのみ起動時に読み込む「署名済みシステムボリューム」、最新のセキュリティアップデートを迅速かつ安全に取得・実行する仕組み、緊急セキュリティ対応「RSR」の実行、アップルシリコンのハードウェア機能を利用したOSの整合性チェックなど、起動プロセスからソフトウェアアップデート、システム実行中の処理に至るまで安全性がカバーされています。

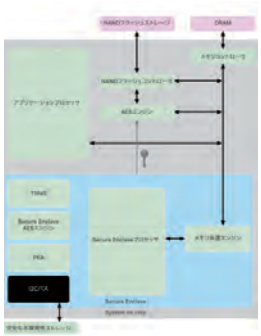
ウィンドウズよりも安全

さらにアプリケーションに関して、アップストアではアップルが安全性を保証したアプリしか公開されないほか、「ゲートキーパー（GateKeeper）」によってアップストアから入手したアプリ、またはアップストアと公証（マルウェアスキャンサービス）の認証を受けたデベロッパーが開発したアプリしか実行できないように制御可能。マルウェアなどを自動検出して削除するアンチウイルステクノロジーの「XProtect」や「MRT（Malware Removal Tool）」も搭載されています。

ここではすべて解説できませんが、この結果としてフォレスター社のレポート「The Total Economic Impact Of Mac In Enterprise: M1 Update」は、アップルシリコン搭載Macは従来のインテルCPU搭載Macと比べてよりセキュアであると発表されています。また、MDMソリューションを組み合わせることでデータ侵害が50％削減されることなどを理由に、MacはウィンドウズPCと比較してより安全であり、企業のセキュリティを強化できると述べています。



Touch IDによって指でタッチするだけで簡単かつ安全にロックを解除できます。アプリやWebサイトへのログイン、パスワードの入力などにも利用されます。



Appleシリコンにはメインプロセッサから隔離された「Secure Enclave」が搭載され、ユーザの機密データを安全に保ちます。



Macには「FileVault」と呼ばれるボリューム暗号化技術によるデータ保護、ファームウェアレベルでのパスワード保護、最新のセキュリティ認証に適合したさまざまなネットワーク保護、さらにはApple AccountやiCloud、Apple Payなどサービスレベルでのセキュリティ機能も多数搭載されています。詳細を知りたい場合は、Appleが公開する「Appleプラットフォームのセキュリティ」が役立ちます。

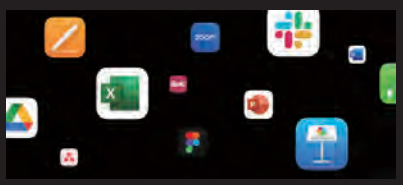
https://support.apple.com/ja-jp/guide/security/welcome/web



MacにはGateKeeperが組み込まれ、App Storeまたは公証を受けたアプリ以外を開けないようにできます。また、macOSが既知のマルウェアを検出した場合は通知を表示し、アプリをゴミ箱に移動します。

Macを選ぶ理由❼ Apps

パワフルなアプリを内蔵! 仕事に役立つアプリがいっぱい。



今はクラウド時代、プラットフォームは選ばない

アプリには困らない

「ビジネスにはウィンドウズ、クリエイティブにはMac」といったイメージが浸透していた頃は「Macには業務用アプリが少ない」と思い込み、導入に踏み切れなかった企業があったかもしれません。しかし、それは大きな誤解であり、かつクラウドが浸透した今となってはもはや間違った認識と言えるでしょう。

まずMacには「メール」や「カレンダー」「リマインダー」「メッセージ」「メモ」のほか、ワープロソフトの「ページズ（Pages）」や表計算ソフトの「ナンバーズ（Numbers）」、プレゼンソフトの「キーノート（Keynote）」、共同作業に適した「フリーボード」など、ビジネスにも大活躍するアプリが内蔵されています。

また、アップストアにはマイクロソフトの「ワード（Word）」や「エクセル（Excel）」、アドビの「アクロバット（Acrobat）」、「Webex」、「スラック（Slack）」、「Box」をはじめとする定番ビジネスアプリがひととおり揃っていますし、仕事効率化のためのアプリがサードパーティからたくさんリリースされています。iPhoneやiPad向けのアプリケーションを合わせると、アップストアにあるビジネスアプリの数は23万5000を超えます。

積極的にクラウドシフト

さらに現在は、「マイクロソフト（Microsoft）365」や「グーグル・ワークスペース（Google Workspace）」をはじめ、勤怠管理や経費精算、プロジェクト管理、ビジネスチャット、社内SNS、会計ソフト、CRM、SFA、名刺管理などのクラウドサービスがプラットフォームを問わず利用できる時代です。

そのため、Macを導入した企業に聞いても「アプリで困った」という話を耳にすることはほとんどありません。特にスタートアップ企業のようにイチからITインフラを構築する場合は、ウィンドウズにもMacにも対応したアプリ／サービスをベースにすることであらゆる業務に対応可能な環境を整えられるでしょう。

また、現在ウィンドウズにしか対応していないアプリを抱えていたとしても、Mac導入を機にプラットフォームを問わずに利用できるサービスへ切り替える、業務に影響のない部署からまずは導入して徐々にサービス転換を図る、または次のページで紹介するようにMac上でウィンドウズを動作させるといった対応策を取ることができます。

もし、それでもなおアプリ面で不安を感じるならば、インターネットなどでMac導入企業の事例を探してみるとよいでしょう。現在Macはさまざまな業種・職種で利用されていますから、自社に近しい業界でMacの導入実績があれば大いに参考になるはずです。



Microsoft 365やGoogle Workspace、Webexなどの定番アプリから、仕事効率化のアプリがApp Storeには多数揃っています。



Macには Apple純正のパワフルなアプリが内蔵されています。購入時から追加のアプリを購入しなくても、さまざまなビジネスに利用できます。



iPhoneやiPad同様に、Macもカスタムアプリを開発して組織内だけに配付することができます。



Appleシリコン搭載Macでは、iPhone／iPadのアプリも動作します。Mac版が用意されていなくても、iPhone／iPad向けに展開され、開発者が利用を許可していれば追加コストなしでMacでも利用可能です。

Macを選ぶ理由❸ Windows

macOSに加え、MacではWindowsも動くから困らない。



Windows 365かParallels、お好みの方法で

Macならではの特権

Mac非対応のアプリケーションやプラグインなどがあっても、MacではウィンドウズをWindowsを利用できます。Macがアップルシリコンへ移行してからはCPUのアーキテクチャがArmベースに変更されたことで「ブートキャンプ」が利用できず、またArm版ウィンドウズのライセンスがマイクロソフトの製品群や一部のOEM製品での利用に限られていたため、仮想化ソフトを利用できない時期がありました。

しかし、2023年7月にマイクロソフトが方針を切り替え、アップルシリコン搭載Macでウィンドウズ11を動作させることを承認し、現在は問題なく利用できるようになっています。

推奨される2つの方法

マイクロソフトが現在推奨しているのは、「ウィンドウズ365（Windows 365）」を利用してクラウド上のウィンドウズ11を利用する方法（MacのWebブラウザ、または「マイクロソフト・リモートデスクトップ」を介して利用）、「パラレルス・デスクトップ（Parallels Desktop）」を利用してアップルシリコンMac上の仮想環境でArm版ウィンドウズ11（プロまたはエンタープライズ）を実行する方法です。企業全体でウィンドウズ365を導入しているなら前者が利用しやすいでしょうが、そうでない場合やネットワーク接続なしでも利用したい場合は、昔からMac向けの仮想化ソフトとして定評のある「パラレルス・デスクトップ」を利用するのが適しているでしょう。

このようにmacOSとウィンドウズというシェアの高い2つのOSを使えることは今になってもMacが持つ大きな特権です。そのため、ウィンドウズオンリーのアプリが存在するからといってMacの導入を躊躇う必要はありません。もちろんウィンドウズのアプリがMac上でもきちんと動作するかは事前に確認する必要があるものの、大きな問題がなかったことから、今では従業員に貸与する業務用パソコンをMacだけにしてMac非対応のアプリはパラレルスで動作させ、業務環境を大きく改善させた企業も出てきています。

MacでWindows 11を動かす2つの方法

Parallels Desktop for Mac

- macOS上でMacのソフトと同時にWindowsを起動して利用できる
- Mac内にあるファイルをWindows側で開いたり、ファイルやフォルダをドラッグ&ドロップしたりと、Macとの連係にも優れる
- インターネット回線がない環境でも利用できる（Windowsアプリを使いたいときにいつでも使える）
- Windows 365を利用する場合はWindows 365のライセンスに加えてAzureのテナント等が必要になるのに対し、Windows 11とParallels Desktopのライセンスだけで済むのでコストを低く抑えられる
- Arm版Windows 11では「DirectX 12」や「OpenGL3.3」以上に依存するハードウェアやゲーム、アプリに影響があるなど、一部動作に制限がある
- ビジネス版やエンタープライズ版にはMacの一斉展開や設定、一括管理など組織での運用をIT管理者が簡単に行えるための機能が多数搭載されている

Windows 365

- MacからはWebブラウザ経由でリモートアクセスして操作する
- Mac用のリモートデスクトップアプリを利用すれば仮想化ソフトのようにWindows 11を1つのソフトとして利用可能
- Parallels Desktopで利用できるArm版Windowsのように機能制限がない
- Microsoftのクラウド（Azure AD）での管理・運用が必要
- クラウド上にホストしたWindows11を利用するため、インターネット回線の接続スピードが十分でない場合はレスポンスが悪くなる。また、インターネット回線がないところでは利用できない。
- Macとの連係は基本的にあまり想定されていない



Microsoftは同社サポートサイトにおいて、AppleシリコンMacでWindows 11を動作させるための2つの方法を公開しています。
URL https://support.microsoft.com/ja-jp



Mac非対応の業務アプリが存在しても、MacでWindowsを動作させればWindowsアプリをMac上で動作させることが可能です。

Parallels Desktopで Mac・Win共存の ビジネス環境を実現



Parallels Desktop for Mac

発 コーレル 価 Standard Edition:1万1500円／年、Pro Edition:1万2900円 ／ 年、Business Edition:1万6100円／年(すべてオンラインストアでの新規ライセンスの場合)、Enterprise Edition: 要問い合わせ
問 https://www.parallels.com/jp/

Macの定番仮想化ソフト

パラレルス・デスクトップは、長い歴史を誇る定番の仮想化ソフトです。

そもそも仮想化ソフトとは、macOS上でウィンドウズなどほかのOSを「1つのアプリのように」実行できるソフトのことです。パラレルス・デスクトップを使えば、macOS上でほかのアプリを起動したまま、ウィンドウズ環境を同時に起ち上げて利用できます。

たとえば、普段はMacで作業していても、業務の一部にウィンドウズ専用のソフトが必要になる場面があります。そのような際に、パラレルス・デスクトップなら、ワンクリックでウィンドウズを起動し、必要な作業をサッとこなして、すぐにMacの環境に戻ることができます。再起動を挟まずに済むため、業務の流れを止めることなくスマートに進行できます。

実機より快適な面もある

「macOS上でウィンドウズを動かすなんて、動作が重くなるのでは?」と心配する人もいるかもしれません。しかし、パラレルス・デスクトップはアップルシリコンを含むMacのハードウェアや最新のmacOSに最適化されており、日常的な業務でパフォーマンスに不安を感じることはほとんどありません。

加えて、パラレルス・デスクトップには、実機のウィンドウズにはない便利な機能も備わっています。たとえば、ウィンドウズを「一時停止」の状態で閉じて、必要なときにすぐ再開できる「サスペンド」機能は、一般的なウィンドウズPCを一から起動するよりも圧倒的に素早く作業を再開できます。また、ウィンドウズを過去の状態に戻せる「スナップショット」機能を使えば、新しいソフトのインストールやトラブルによってシステムが不安定になってしまった場合でも、簡単に安定した状態へと復元できます。

Mac上でウィンドウズを快適かつ安全に使えるパラレルス・デスクトップは、これからMacを業務に取り入れようと考えている企業やビジネスユーザにとって、非常に頼れる選択肢となるでしょう。



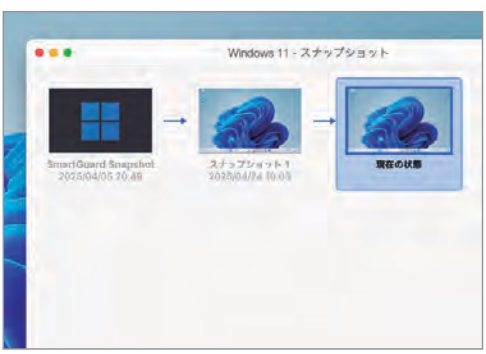
❶ Windowsを、まるで1つのアプリのように利用できるParallels Desktop。フルスクリーンモードにして完全にWindows PCのように使うことも可能です。



❷ Windows内のアプリだけをMacのデスクトップ上で開くモード(コヒーレンス)もあります。OSの違いをほとんど意識することなく、業務で必要なWindowsアプリを使えます。



❸ サスペンド機能を使うと、仮想マシン(Windows)の状態を一時停止状態にしたうえで閉じることができます。使いたいときには1クリックでスピーディに再開できます。



❹ 仮想マシンの状態を保存し、復元できるスナップショット機能。開発や検証などで一時的になんらかのツールをインストールし、用が済んだら元の状態に戻したいケースで重宝します。

法人導入にはBusiness Editionが効果的

パラレルス・デスクトップには複数のエディションがありますが、法人での導入には、「ビジネス・エディション」が効果と効率の面で優れています。このエディションは、仮想マシンに割り当てられるCPUコア数やメモリ量が多く、さらに法人向けのライセンス管理やポリシー適用機能も充実しています。

最大の特徴は、複数のライセンスを一元管理できる点です。社員の異動が発生してもライセンス管理者が簡単に割り当てを変更でき、運用の負担軽減につながります。

また、期間限定のプロジェクトに参加する外部スタッフ向けに、期限付きライセンスを発行することも可能です。ウィンドウズ仮想マシンにも有効期限を設定でき、パラレルス・デスクトップのライセンスと仮想環境の各ライセンス流出をプロテクトできます。

ライセンス管理以外にも、企業にとって便利な機能が揃っています。たとえば、「構成プロファイル」を使って管理者が用意した仮想マシンを自動配付したり、企業のID管理システム（IdP）と連携して管理者が社員のライセンスを管理したりといったことも可能です。

ビジネス・エディションは、1ライセンスから導入でき、ライセンスの追加契約も柔軟に行えます。法人導入の際には、管理性と拡張性を兼ね備えたビジネス・エディションの選択をおすすめします。

なお、最上位のエンタープライズ エディションではSSO（シングルサインオン）でパラレルス・デスクトップの利用ライセンスをアクティベートすることもできます。組織のポリシーに応じた選択肢が用意されているのも、法人向けパラレルス・デスクトップの大きな強みです。

Business Editionでのライセンス管理方法



1 Business Editionのライセンス管理者は、Webブラウザから管理ページにアクセスし、ライセンスの管理を行います。



2 管理ページでは、Parallels Desktopの招待メールを送ったり、社員への割り当てを停止したりといった操作が行えます。



3 招待メールを送ると、社員宛にこのようなメールが届きます。記載されたリンクをクリックすると、インストーラのダウンロードが始まります。



4 Business Editionでは、期限付きのライセンスキーを発行することができます。期間限定のプロジェクトなどで活用するといいでしょう。



5 「構成プロファイル」の機能を使い、管理者があらかじめ用意した仮想マシンを配付することも可能です。社員の部署や役職に応じて異なる構成プロファイルを作成することもできます。



6 Microsoft Entra ID（旧Azure AD）などのIDプロバイダ（IdP）を導入している企業の場合、IdP連携を使って「法人アカウントを使用したアクティベーション（SSOアクティベーション）」を利用することが可能です。

Parallels Desktopの配備方法

パラレルス・デスクトップの基本的なインストール方法は非常に簡単です。オンラインでソフトを購入した場合は、専用サイトからディスクイメージをダウンロードし、インストーラを起動します。画面の案内に従ってライセンスキーを入力すれば、アプリのインストールが完了します。

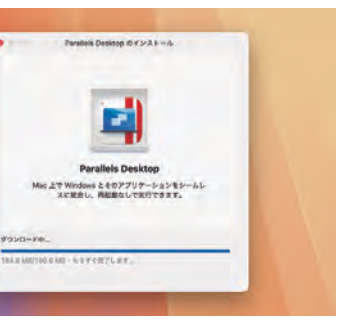
続いて、パラレルス・デスクトップ上で、ウィンドウズ11のインストールを進めます。これも画面の案内に従っていけば戸惑うことはないでしょう。インストール完了後、ウィンドウズ上でライセンスを購入するか、すでに持っているプロダクトキーを入力すればセットアップは完了です。

ビジネス・エディションでは、ライセンス管理者が各社員に招待メールを送信し、そこから各自がインストーラをダウンロードできます。導入フローを標準化できるため、社内展開が効率化されます。

さらに、エンタープライズ向けのマイクロソフト365 E3／E5を導入している場合は、クラウド認証によってウィンドウズのライセンス認証が可能になります。個別のライセンスキーを社員に管理させる必要がないため、トラブルの防止にもつながります。

ビジネス・エディションの強みは、セットアップ済みのウィンドウズ環境を社員に一括配備できる点にもあります。業務に必要なアプリをインストールした仮想マシンを社員に展開すれば、誰でもすぐに業務を始められる環境を整備できます。さらにMDM（モバイルデバイス管理）ツールと連携させれば、パラレルス・デスクトップの導入からセットアップ済みウィンドウズ環境の配付までをワンストップで実現でき、IT担当者と社員双方の負担を軽減できます。

Parallels DesktopとWindowsのインストール方法



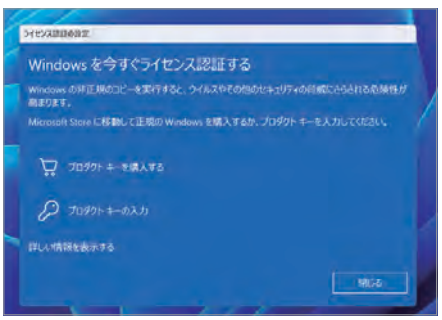
❶ ダウンロードしたインストーラをダブルクリックすると、Parallels Desktopのインストールが始まります。一般的なMac用アプリと流れは同じで、特に戸惑うことはないでしょう。



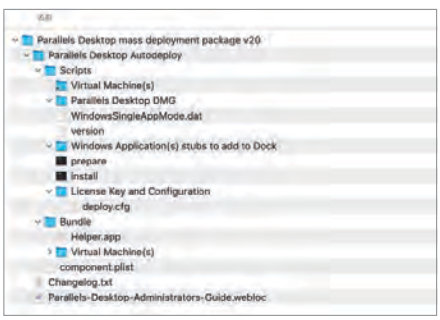
❷ アプリ上で直接Windows 11のインストールに進めます。なお、このダイアログでインストールできるのは、Windows 11 Proです。マイクロソフトのライセンスでは、仮想環境での利用はProとEnterpriseが認められています。



❸ インストール中は何度か画面が切り替わりますが、「インストールが完了しました」と表示されるまで待ちましょう。すべて終わるとWindowの画面が表示されます。



❹ Windowsを起動すると、ライセンス認証のダイアログが表示されます。ライセンスを購入するか、すでに持っているプロダクトキーを入力しましょう。



❻ 「Jamf Pro」などのMDMツールを使い、Parallels Desktopと仮想マシンをまとめたパッケージを作成して配付することも可能です（図は、配付用に作成したパッケージ）。



❺ Microsoft 365のE3 ／ E5を利用している企業では、クラウド認証によってWindowsのライセンス認証が可能になります（Microsoft Entra IDの利用が必要）。

Parallels Desktopで実現する多彩な業務

パラレルス・デスクトップを使えば、ウィンドウズ専用の業務アプリをMac上で活用できます。

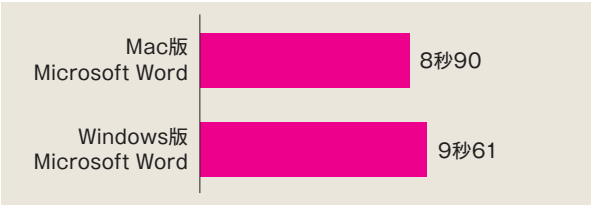
パラレルス・デスクトップで利用できるのは「アーム（Arm）」版のウィンドウズ11というもの。一般的なウィンドウズPCにインストールされている「x86」版とは若干異なり、一部ソフトが最適化されていない場合もありますが、多くのアプリは問題なく動作します。

また、映像や音声などの処理を行うための「ダイレクトX」は12に対応予定です。これにより、高速描画とCPU・GPUの効率的な連携が可能となり、ゲームや映像表現がより滑らかでリアルになります。

Point 1 Windowsマシンより快適？ あらゆる業務が効率的に

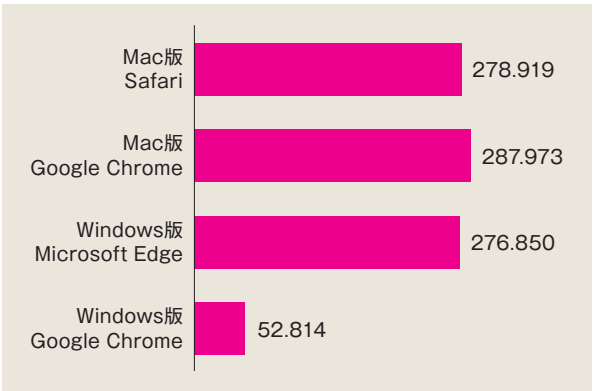
Parallels Desktop上で動作するWindowsは、日常的な業務において十分なパフォーマンスを発揮します。たとえば、ファイルの移動や複製といった基本操作、メモ帳や電卓などの標準アプリの利用では、動作の重さを感じることはほとんどありません。今回、10個のテキストファイルをMicrosoft Wordで開く時間をmacOSとParallels Desktop上のWindowsで比較してみたところ、その差はわずかで、ほとんど意識せずに使えるレベルでした（M1 Pro搭載MacBook Proで計測）。

また、Webブラウザの動作も軽快です。右のグラフはJavaScriptの実行性能を測定する「JetStream」の結果で、Parallels上のWindowsでもMac版Safariに迫るスコアを記録しています。業務上、Windows版のMicrosoft Edgeで特定のWebアプリを使う必要がある業務でも、Parallels Desktopがあれば実機のWindows PCがなくても対応できるようになります。



テキストファイルを開く時間を計測。MacとWindowsのどちらもMicrosoft Wordを使用。アプリが起動していない状態で10個のファイルを開き、最後のファイルが表示されるまでにかかった時間。ほとんど違いがありませんでした。

Webブラウザのベンチマークソフト「Jetstream 2.2」のスコア。数値が大きいほど高性能です。Windows版のGoogle ChromeはArm版に最適化されていないため低スコアですが、Windows版のMicrosoft Edgeは、Parallels Desktop上でもMac版Safariに匹敵するスコアになりました。

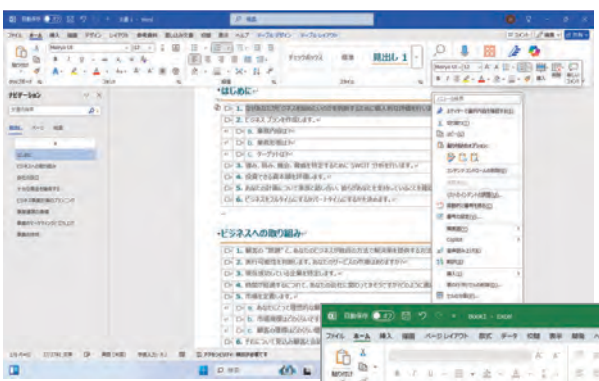


Point 2 細かな差異に悩むことなくOffice系ツールを利用できる

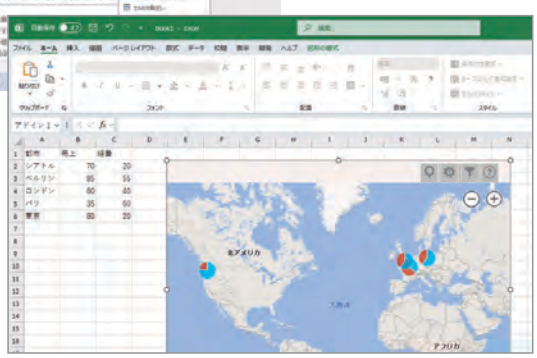
Microsoft OfficeにはMac版もありますが、細かな差異がネックになり、Windows版のOfficeを使いたくなることがあります。たとえば、Officeシリーズの特徴である「リボンUI」は、Mac版とWindows版でわずかにレイアウトが異なりますが、Parallelsを使えば見慣れたWindows版の表示となり、戸惑うことなく作業を進められます。

また、キーボードショートカットやコンテキストメニューもWindowsと同様に使えるため、普段どおりの操作感で効率よく作業を進められます。Windowsでの仕様に慣れた人にとっては、大きなメリットになるでしょう。

さらに、Officeには「アドイン」という機能追加の仕組みがありますが、一部のアドインはWindows専用でMac版では利用できません。そうしたアドインを業務で活用している場合でも、Parallels DesktopならWindows環境でそのまま使用できるため、機能面でも妥協せずに作業を継続できます。



同じWordでも、リボンUIやコンテキストメニューの内容は、Mac版とWindows版で異なる部分があります。こうしたちょっとした差異を気にせず使えるのはParallels Desktopのメリットです。



ExcelのマクロもWindows PCでの実行と同じく動作します。Macを利用している法人でParallels Desktopが導入されるケースでは、この観点も大きいといえます。たとえば、Microsoft Excelのアドイン「Bingマップ」は、Mac版では安定して動作しませんが、Parallels Desktopを使えば問題ありません。

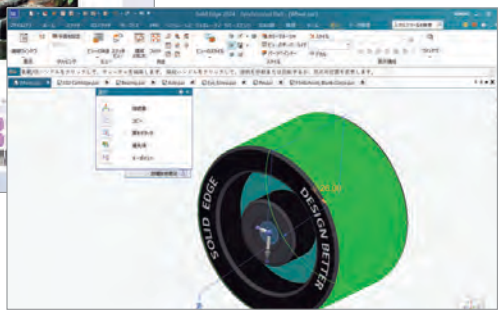
Point 3 Windows用のクリエイティブソフトも快適に動作

Macにもクリエイティブソフトは多数ありますが、Windows専用のツールを使い続けたい人もいるでしょう。Parallels Desktopを使えば、グラフィック、CADと特定用途のプラグイン、映像編集などのアプリも多くが快適に動作します。

重いデータを扱う際のパフォーマンスはMacの性能に左右されますが、それはMacネイティブのソフトでも同様です。たとえばWindows専用の動画編集ソフト「Clipchamp」では、4K動画の編集や書き出しもスムースに行えました。慣れ親しんだツールをそのまま使いたい方にとって、有力な選択肢となります。



Clipchampは、Microsoftが提供する動画編集ソフトです。Windowsの仮想化環境で4K素材を読み込んで動画編集を行ってみましたが、操作感は快適でした。

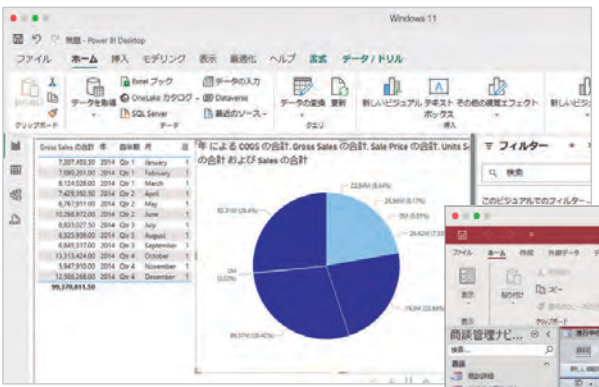


Windows用のCADソフト「Solid Edge」の画面です。企業内でWindowsのみのCADソフトを使っている場合でも、Parallels Desktopがあれば対応が可能です。

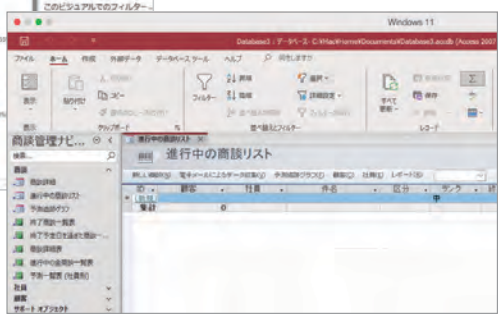
Point 4 マーケティング部署でもMac+Parallels Desktopを活用

マーケティング部門でも、Parallels Desktopは大いに活用できます。たとえば「Microsoft Power BI」は、複雑な売上データやユーザ行動を視覚化し、戦略立案に役立てられる分析ツールです。アプリ版はWindows専用ですが、Parallels Desktop上で問題なく動作します。

また「Microsoft Access」は、顧客管理などのデータベース作成に適しており、部内での情報共有にも便利です。これもWindows専用ですが、Parallels Desktopで動作します。ツールの選択肢を狭めることなく、柔軟かつ効率的な業務遂行が可能になります。



分析ツールのMicrosoft Power BIはWebブラウザ版も用意されていますが、詳細なレポート作成やカスタマイズにはデスクトップ版が必要。Macで使うにはParallels Desktopが頼りになります。

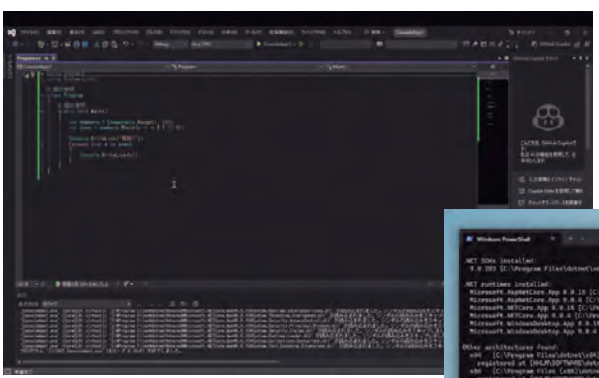


Microsoft Accessは定番のデータベースアプリ。マーケティング部門をはじめ、企業のさまざまな部署で活用されています。

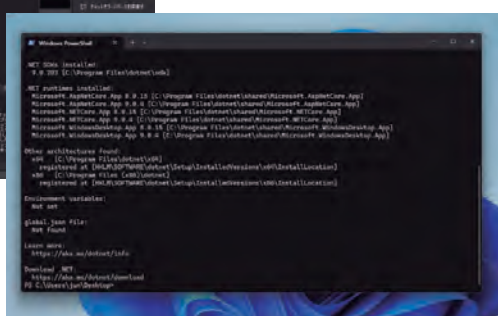
Point 5 複数のOSでアプリケーションを開発・検証できる

Parallels Desktopを使えば、Mac1台で複数のOS環境を切り替えながら開発や検証を行えます。たとえば、macOS上ではXcodeでiOSアプリを開発し、Windows環境ではVisual Studio（フル版）を使ってC#や.NETアプリケーションの開発・デバッグが可能です。

さらに、Windowsのコマンドラインツールも利用できるため、アプリケーションの検証やシステムテストも実施できます。Parallels Desktopによって、プロジェクトごとに最適な開発ツールを選択でき、クロスプラットフォーム対応が求められる現場でもMac1台で作業が行えます。



Windowsでのアプリ開発を支えるVisual Studio。Parallels Desktop上でもスムースに動作し、MacだけでC#やC++のアプリケーション開発、デバッグ作業が可能になります。



Windows用のコマンドラインツールを活用すれば、アプリケーションの環境検証やシステムテストも手軽に実施可能。Mac上で開発から検証までを一貫して行える柔軟な環境を構築できます。

Macらしい使い勝手をWindowsで実現

Macでウィンドウズを使うと聞くと、操作の流儀の違いにストレスを感じるのではないかと心配する人がいるかもしれません。しかし、パラレルス・デスクトップなら心配無用です。Macで慣れ親しんだ操作感をそのままウィンドウズに引き継げるように設計されているからです。

マルチタッチジェスチャやMacライクなキーボードショートカットをはじめ、あらゆる面で「Macらしさ」を損なわない工夫が凝らされています。さらに、最新のパラレルス・デスクトップでは、アップルの最新AI機能であるアップル・インテリジェンス（Apple Intelligence）までウィンドウズ上で利用できます。

Point 1 マルチタッチジェスチャでWindowsを操作

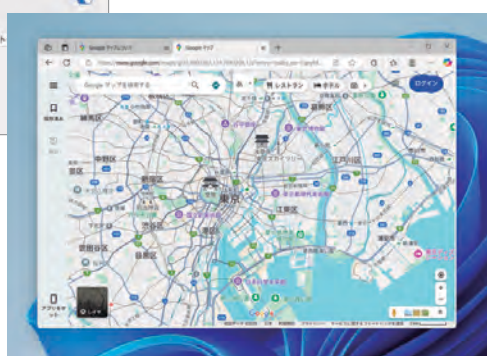
Parallels Desktopは、MacBookのトラックパッドやMagic Trackpad、Magic MouseといったApple製の入力デバイスを使って操作することで、Windows上でもマルチタッチジェスチャを利用できます。仮想環境でWindowsを動かしているとは思えないほどスムーズに、Macと同じ感覚で操作することが可能です。

たとえば、トラックパッドで2本指スクロールを使えば、Windows上でも自然に画面をスクロールできます。また、Microsoft EdgeやGoogle ChromeといったWebブラウザや「ペイント」などのアプリでは、ピンチイン／ピンチアウトによる拡大／縮小操作にも対応しています。

さらに、仮想マシンを全画面で表示している場合でも、3本指の左右スワイプでMacのデスクトップに戻ったり、3本指の上方向スワイプ（Mission Control）で仮想マシンとほかのアプリのウインドウをまとめて確認したりといった操作も問題なく行えます。これらのマルチタッチジェスチャは、Macの「システム設定」でカスタマイズすることも可能です。



1 マルチタッチ操作の設定は、Macのシステム設定で行います。ここで設定した内容（たとえばスクロール方向）などが、そのままWindowsにも反映されます。



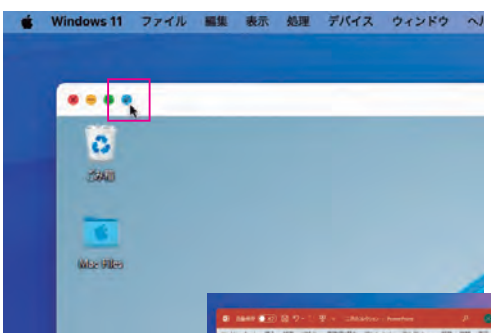
2 Microsoft EdgeなどのWebブラウザでは、2本指スクロールはもちろん、ピンチ操作による拡大／縮小にも対応します。ピンチ操作はGoogleマップのような地図アプリで重宝します。

Point 2 CoherenceでMacアプリのようにWindowsを利用

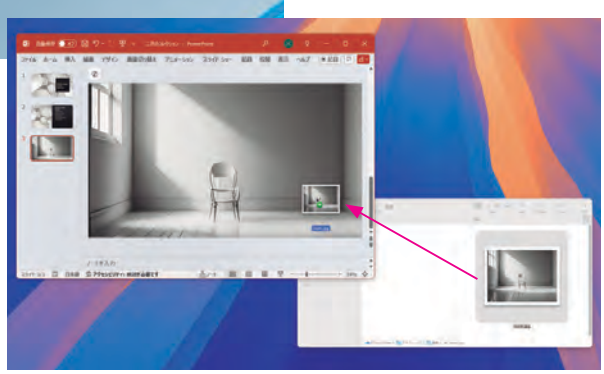
Parallels Desktopを使えば、Windowsのアプリをまるで Mac用アプリのような感覚で扱えます。その鍵となるのが、「Coherence（コヒーレンス）」と呼ばれる表示モードです。Coherenceを有効にすると、Windowsのデスクトップが非表示になり、アプリのウインドウだけが画面上に表示されます。

この状態では、さまざまな面でMacのアプリと同様の操作感が得られます。たとえば、Windows版PowerPointのウインドウにFinderから画像を直接ドラッグ&ドロップして、スライドに画像を挿入できます。また、[Command] キー＋ [Tab] キーのショートカットで最前面のアプリを切り替えることも可能です。

Coherenceの起動は簡単です。Windowsのウインドウ左上にあるボタンの中から水色のボタンをクリックするか、メニューバーから [表示] → [Coherence] を選ぶだけ。元に戻したい場合も、メニューバーから [表示] → [Coherenceの終了] を選べば、すぐに通常の表示に戻せます。



1 Coherenceを起動するには、ウインドウの左上にある4つ並んだボタンの中から、水色のボタンをクリックしましょう。画面中央に[Coherenceへの切り替え]というダイアログが数秒間表示されたあと、Coherenceに切り替わります。



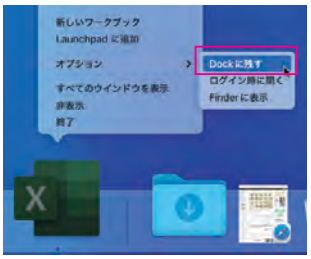
2 Coherenceモードでは、FinderなどからWindowsアプリのウインドウにファイルをドラッグ&ドロップして移動できます。

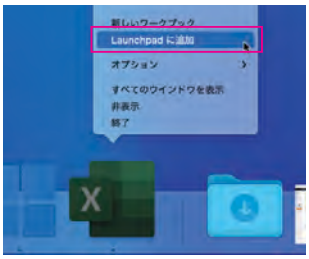
Point 3 DockやLaunchpadからWindowsアプリを起動できる

業務などで特定のWindowsアプリを繰り返し起動する人は、DockやLaunchpadにアプリを登録しておくと便利です。

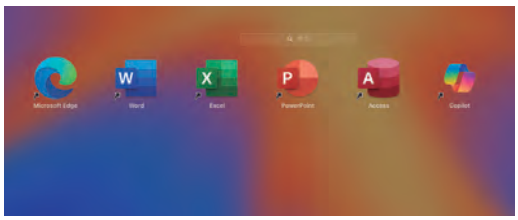
登録操作はDockのアプリアイコンから簡単に行えます。一度登録すると、以降はParallels Desktopが起動していない状態でも、LaunchpadやDockからアプリを選ぶだけで即座に起動できるようになります。

Coherenceと組み合わせると、Windowsを使っている感覚をほとんど感じずに目的のアプリを開き、作業を完結できます。WindowsよりもMacに慣れている人にとっては、「Windowsでの操作がなんとなく面倒」という抵抗感を払拭してくれる仕組みと言えるでしょう。





❶ DockやLaunchpadにWindowsアプリを追加すると、Macアプリと同じ感覚で起動できるため便利です。



❷ Dockで[Launchpadに追加]をクリックすると、WindowsアプリもLaunchpadに登録されます。よく使うものだけを素早く見つけられるため効率的です。

Point 4 Apple IntelligenceをWindows上で利用

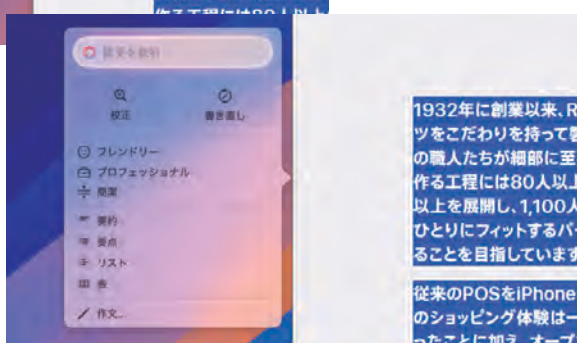
AppleのAI機能「Apple Intelligence」には、長文の要約や校正、文書作成を支援する「作文ツール（ライティングツール）」という機能があります。Parallels Desktopを使えば、この作文ツールをWindowsのアプリ上でも活用できます。なお、利用するには、Apple Intelligenceが利用できるシステム条件を満たしている必要があります（Apple M1以降のチップを搭載したMac）。

この機能を使えば、WindowsのMicrosoft Edgeで表示している長文のWebページを要約したり、Windowsのワープロソフトに入力した文章を校正し、そのまま置き換えたりすることが可能です。Mac用ソフトで作文ツールを使用した場合とほとんど変わらない操作感が、Windows上でも再現されます。

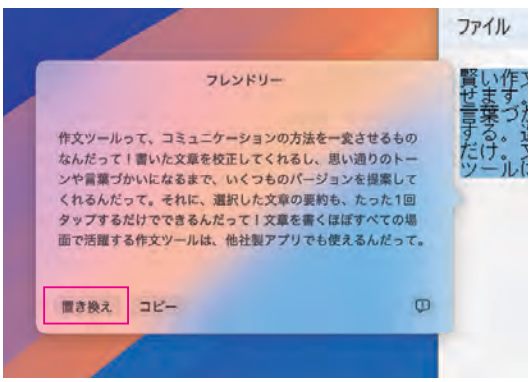
Parallels Desktopを活用すれば、macOSの最新AI機能とWindowsの業務アプリを同時に利用できる環境が整います。Apple Intelligenceを「Apple製品の中だけの機能」にとどめず、ビジネスのさまざまな場面へと広げていけるのです。



❶ 作文ツール（ライティングツール）を利用するには、Windowsアプリ上でテキストを選択し、[編集]メニューから[ライティングツール]を選びます。Microsoft WordやPowerPointといったアプリでは、文章を選択して右クリックし、コンテキストメニューから作文ツールを呼び出すことも可能です。



❷ Macと同じ作文ツールパネルが表示されます。長文を要約したり、要点を箇条書きで書き出したりといったことができます。



❸ 作文ツールは、「メモ帳」やワープロソフト、メールソフトなどでも利用できます。リライトを行うと変更結果が表示され、[置き換え]ボタンを押すと元のアプリに反映されます。



❹ 作文ツールパネルの上側にある文字入力欄にプロンプトを入力すると、ChatGPTと連携した文章作成ができます。インターネットから情報を調べて文章をまとめることも可能です。

Point 5 使い慣れたキーボードショートカットをそのまま利用

Macに慣れている人なら、普段使っているキーボードショートカットをWindowsでも使いたいと思うことでしょう。Parallels Desktopは、そんなユーザのニーズにもしっかりと応えてくれます。

たとえば、[command] キー＋[C] キー（コピー）など、Macでおなじみの [command] キーを使ったショートカットは、Windowsでは通常 [control] キーとの組み合わせになります。しかし、[command] キーの操作に慣れている人のために、代表的なショートカットはそのままWindows上でも使えるようになっています。

もちろん、Windowsの操作のほうが慣れているという人は、[control] キーを使ったキーボードショートカットをそのまま使うこともできます。さらに、ユーザの好みに応じて、ショートカットを個別にカスタマイズすることも可能です。自分に合った操作環境を構築できる柔軟さも、Parallels Desktopの魅力の1つだと言えるでしょう。



❶ キーボードショートカットのカスタマイズは、[Parallels Desktop] メニューから [設定] パネルを開いて行います。



❷ 「Parallels Desktop環境設定」ウインドウが開いたら、[ショートカット] タブに切り替えます。左側にあるリストの [仮想マシン] 欄で変更したい仮想マシンを選び、キーボードショートカットのオン／オフや追加を行います。

NEXT STEP 日本語キーボードに合わせてキー設定をカスタマイズしよう！

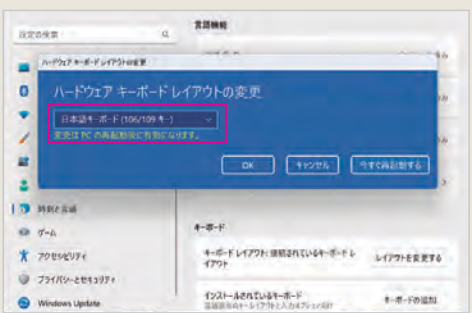
Parallels DesktopでWindowsをインストールした直後は、Macの日本語キーボードで思いどおりに文字入力できず困ることがあります。たとえば、[@] キーを押しても「@」が入力できないといった事態が発生するのです（[shift] キー＋ [2] キーを押すと入力できます）。

これは、Windows側がキーボードの種類を正しく認識できていないことが原因です。問題を解決するには、Windowsの「設定」を開き、キーボードの設定を変更する必要があります。ただし、設定項目は階層の深いところに存在するため、自身で見つけ出すのはなかなか難しいはずです。そのため、以下の手順を確認しながら、正しく操作することをおすすめします。

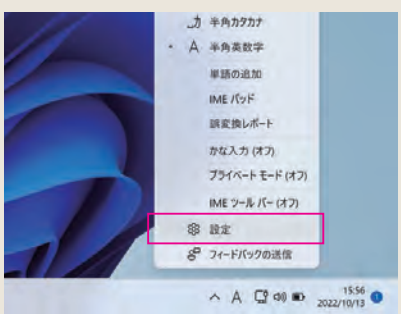
また、Windows上で何も設定をしていないと [かな] キーや [英数] キーを使って入力ソースを切り替えることができません。Macと同じ使い勝手をWindows上でも実現するには、やはり設定を変更する必要があります。文字入力の設定は日常的な使い勝手を大きく左右するので、忘れずに設定しておきましょう。



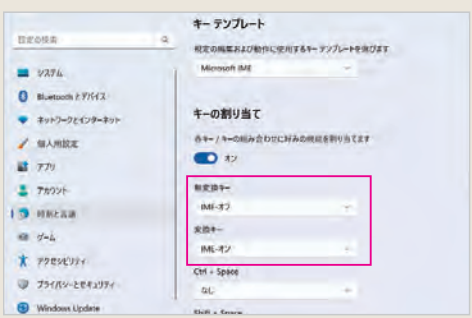
❶ 「設定」→[時刻と言語]→[言語と地域] と進むと、使用言語に [日本語] が表示されます。右側にある [...] を押して [言語のオプション] を選びましょう。



❷ [キーボードレイアウトの変更] のダイアログが表示されるので、[日本語キーボード(106／109)キー] を指定し、[今すぐ再起動する] を選択します。これでキーボードの種類が正しく判別されるようになります。



❸ 続いて、[かな] キーと [英数] キーを有効にしましょう。まずタスクバーにある [A] [あ] などの文字を右クリック（または [control] キー＋クリック）して、メニューから [設定] を選びます。



❹ [キーとタッチ] のカスタマイズ] を選択し、[無変換キー] に [IME-オフ]、[変換キー] に [IME-オン] を割り当てましょう。これで設定は完了です。

WindowsとMacがシームレスにつながる

パラレルス・デスクトップを活用すれば、Macとウィンドウズとのファイルやクリップボードなどのデータをシームレスにやりとりできます。ドラッグ&ドロップやコピー&ペーストによるデータのやりとりはもちろん、Macとのフォルダの共有も柔軟に設定できます。

また、Macに接続されたハードウェアも、複雑な設定やドライバの追加インストールを行うことなく、そのままウィンドウズで使えます。

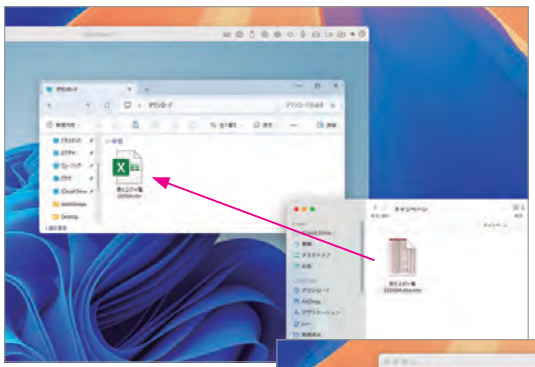
一方で、セキュリティを重視したい場面では、あえて両OSを分離して独立運用することも可能です。業務内容に応じて柔軟に切り替えられるため、幅広い用途で重宝するでしょう。

Point 1 ドラッグ&ドロップやコピー&ペーストでファイルを移動

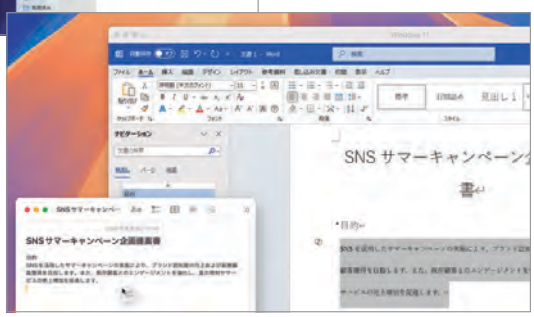
Parallels Desktopは、MacとWindowsとの連携を非常に快適に行えます。その代表的な例が、ドラッグ&ドロップやコピー&ペーストによるデータのやりとりです。標準設定では、MacのFinderからWindowsのファイルエクスプローラ（ファイルウインドウ）にファイルをドラッグすれば、簡単にファイルをコピーできます。もちろん、その逆も可能です。

また、クリップボードも共有されており、テキストや画像のコピー&ペーストも特別な操作なしに簡単に行えます。macOSにはiPhoneやiPadとクリップボードを共有できる「ユニバーサルクリップボード」という機能がありますが、ユニバーサルクリップボードの機能とParallels Desktopを組み合わせれば、iPhoneなどでコピーした内容をWindowsアプリに素早く貼り付けることも可能です。

このように、OSの違いを意識することなく作業をシームレスに進められるため、ストレスの少ないハイブリッド環境を実現できます。



1 MacのFinderウインドウからWindowsのファイルエクスプローラにドラッグ&ドロップでファイルをコピーできます。



2 テキストや画像のコピー&ペーストも、OSの違いを意識することなく行えます。テキストを選択してドラッグ&ドロップで貼り付けることも可能です。

Point 2 Macに接続されたハードウェアを共有

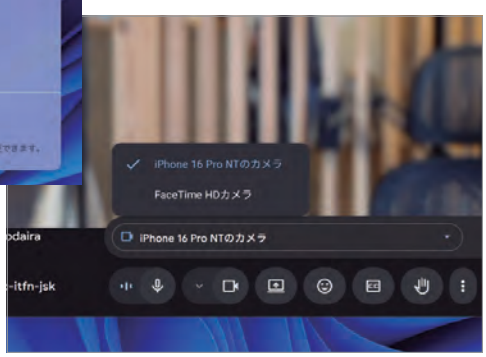
Parallels Desktopでは、Macに接続された各種ハードウェアをWindows環境で利用できます。たとえば、MacにUSBメモリや外付けハードディスクを接続すると、Parallels Desktopに「MacとWindowsのどちらに接続するか」という旨のダイアログが表示され、Windows側を選べば接続可能です。プリンタやスキャナといった周辺機器も、特別な設定なしに共有できる場合が多く、業務環境をそのままWindowsに引き継げます。

さらに、MacのFaceTimeカメラやマイク、スピーカもWindowsアプリで使用できます。ZoomやMicrosoft Teamsといったビデオ会議ツールをWindows版で使う際にも、Macのハードウェアをそのまま活用できるため、準備に手間がかかりません。

なお、Parallels Desktopでは、仮想マシンを外部ストレージにバックアップし、必要なときには外部ストレージから直接起動することが可能です。外部ストレージに開発環境を入れて手軽に持ち運べる点は、開発の現場や企業のIT部門では特に重宝するでしょう。



1 Parallels Desktopの標準設定では、Macに新しいデバイスを接続した際に、MacとゲストOSのどちらに接続するかを確認できます。FAT32などWindowsで利用できるフォーマットならそのまま読み書きできます。また、ストレージの共有設定を行えば、Mac用フォーマットの外部ストレージにもアクセスできます。もちろん、共有を行わずにMacだけで利用することも可能です。



2 MacにはiPhoneを外部カメラとして使う「連係カメラ」機能がありますが、この連係カメラはWindows上でも特別な設定をせずにそのまま利用できます。

Point 3 MacとWindowsでファイルを共有

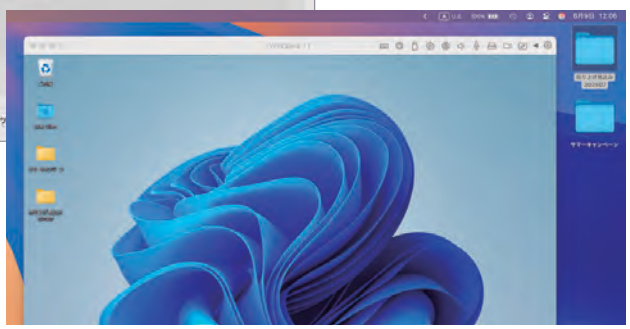
Parallels Desktopでは、MacとWindows間でフォルダを共有する機能が充実しています。初期設定のままでも、Macの[デスクトップ]や[書類]フォルダ、[ダウンロード]フォルダなどがWindows側と共有されており、同じファイルを両OS間で簡単にやりとりできます。

さらに、設定画面から共有フォルダを任意にカスタマイズすることも可能です。特定のプロジェクトのフォルダだけを共有したり、セキュリティ上の理由から一部のフォルダを除外したりと、運用ニーズに応じた調整が行える点が魅力です。

また、前ページで紹介したように、Mac側で認識している外部ストレージを共有ディスクとして使用する機能もあります。この機能を使えば、APFSなどのMac用フォーマットのストレージもWindowsからアクセスできます。加えて、iCloudやDropboxといったクラウドストレージの共有にも対応しており、シームレスなファイルアクセス環境が隅々まで整っています。



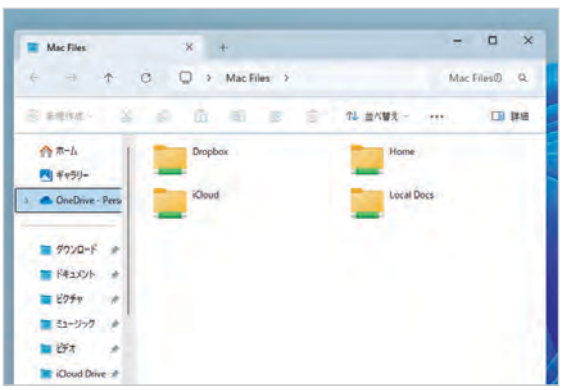
1 MacとWindowsの共有の設定は、[構成]ウインドウを開き、[オプション]→[共有]画面から行います。



2 デスクトップを共有した状態。同じフォルダがMacとWindowsの両方のデスクトップに表示されています。



3 共有するフォルダは、[オプション]→[共有]画面の[カスタマイズ]や[フォルダを管理]ボタンをクリックして細かくカスタマイズできます。



4 Windowsのデスクトップにある[Mac Files]フォルダを開くと、共有しているフォルダをすべて表示できます。設定でクラウドのフォルダをWIndowsと共有している場合、[iCloud]や[Dropbox]といったフォルダも表示されます。

Point 4 MacとWindowsを分離させてセキュリティを向上

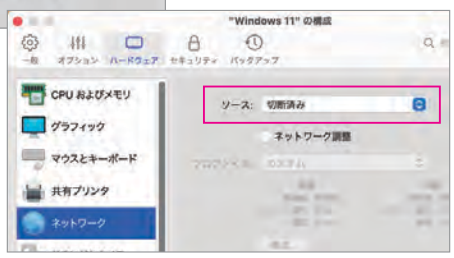
Parallels Desktopでは、MacとWindowsの環境をあえて切り分けて運用することも可能です。たとえば、ファイル共有やボリュームの共有、クリップボード共有などを無効にすれば、MacとWindows間のデータのやりとりを遮断し、完全な独立環境として使えます。これは、未知のファイルやアプリを検証用の仮想環境で試す際に有効で、Macや業務用Windowsへの影響を最小限に抑えられます。

また、ネットワーク設定を個別に管理することで、Windowsだけをスタンドアロンにすることもできます。業務用ソフトの検証や、外部接続を制限したクローズドなテスト環境の構築にも最適です。

このように、Parallels Desktopでは「つなぐ」「分ける」を簡単に切り替えられる柔軟性があります。セキュリティを確保したWindows環境を手軽に構築できるのは、仮想化ならではのメリットと言えるでしょう。



1 [構成]ウインドウの[オプション]→[共有]画面でMacとのフォルダ共有やボリュームの共有をオフにすれば、独立した環境としてWindowsを利用できます。



2 [構成]ウインドウの[ハードウェア]→[ネットワーク]画面でネットワークを切断すれば、インターネットやローカルネットワークから切り離すこともできます。

一段上の活用でParallels Desktopのメリットを最大化

パラレルス・デスクトップには、仮想環境のパフォーマンスを高めるための多彩なテクニックが用意されています。初期設定のままでも問題なく利用できますが、業務内容や作業スタイルに応じて設定を調整することで、よりパワフルな環境を手に入れられます。

たとえば、CPUやメモリの割り当てなど、仮想マシンの構成を最適化することで、処理速度や安定性が向上します。加えて、仮想マシンを停止せずにバックグラウンドで動作させる設定を活用すれば、作業効率はさらに高まります。

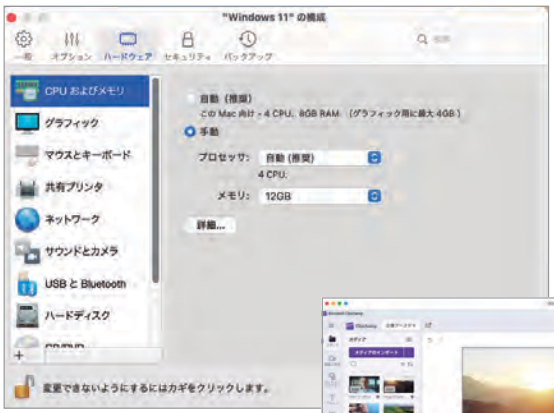
さらに、トラブル発生時に仮想環境を以前の状態に戻す「復元機能」など、業務を安全に進めるためのサポート機能も充実しています。

Technique 1 CPUとメモリを個別に設定

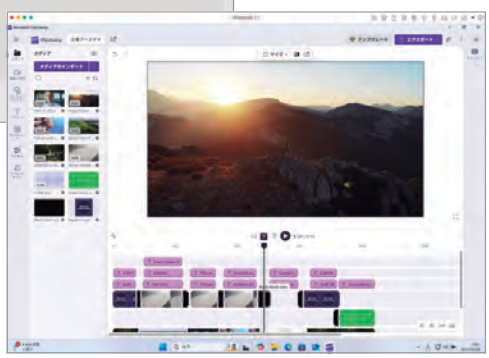
Parallels Desktopは、初期状態でも高いパフォーマンスを発揮しますが、業務内容に応じてCPUコア数やメモリの割り当てを調整すれば、さらに効率的な環境を構築できます。膨大なデータを含んだExcelファイルの操作や、動画編集アプリ、3DCGやCADアプリの使用など、負荷の高い処理を行う場合には、設定の見直しが効果的です。

設定は、Parallels Desktopの［構成］→［ハードウェア］→［CPUとメモリ］から行います。搭載されているMacの性能に応じて、仮想マシンに割り当てるリソースを調整しましょう。たとえば、Macに16GB以上のメモリがある場合、Windowsに8GBを割り当てることで安定性が向上します。

ただし、macOS側のメモリが逼迫するとマシン全体のパフォーマンスが低下する可能性もあるため、割り当て過ぎず業務の実態に即したバランス調整が重要です。用途に合わせたチューニングで、Parallels Desktopのメリットを最大限に引き出しましょう。



❶［自動（推奨）］でも、使用するMacのCPU・メモリ搭載量に合わせて最適な配分が行われますが、用途に応じて手動で変更をすることも可能です。



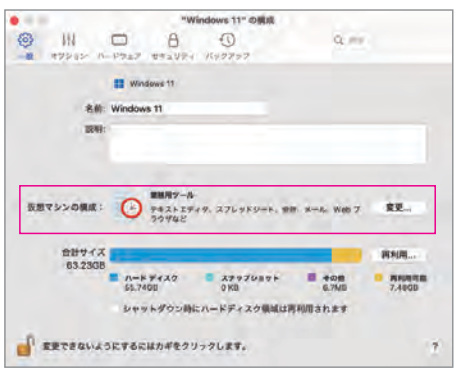
❷たとえば、動画編集アプリでは大量のメモリを消費しがちです。大量のメモリを搭載したMacの場合、手動で多くのメモリを割り当てることでパフォーマンスの向上が見込めます。

Technique 2 用途に応じて構成を最適化

［構成］パネルの［一般］タブには、［仮想マシンの構成］という項目があり、「業務用ツール」「ソフトウェア開発」「ゲームのみ」など、5種類の選択肢が用意されています。そこから、自分のWindowsの用途に近いものを選べば、目的に応じた設定を簡単に適用できます。

この選択によって、前述のCPUコア数やメモリの割り当て量に加え、グラフィック設定、Macとのファイル共有、フルスクリーンモードの動作など、多岐にわたる項目が一括で最適化されます。細かな設定を個別に見直す手間が省けるため、非常に便利です。もちろん、［仮想マシンの構成］を選んだ後で、必要に応じてメモリ割当量などを調整することも可能です。

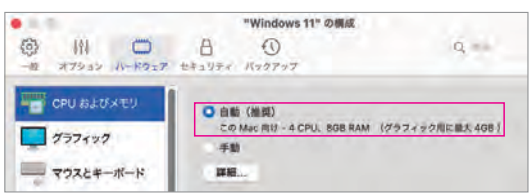
もし自分の用途を明確に絞り込めない場合、比較的軽い作業が中心なら「業務用ツール」を、負荷の高い処理を行う可能性がある場合は「設計」を選んでおくとよいでしょう。





❶［構成］パネルの［一般］で［仮想マシンの構成］をクリックすると、5種類の項目から用途を選択できます。

❷Macのスペックよって数値は変わりますが、例えば「業務用ツール」の構成でメモリ割り当てが6GB（グラフィック用に最大3GB）だったマシンを「設計」の構成に変更すると、それだけでメモリ割り当てが8GB（グラフィック用に最大4GB）に変わりました。



Technique 3 仮想マシンのストレージサイズを設定

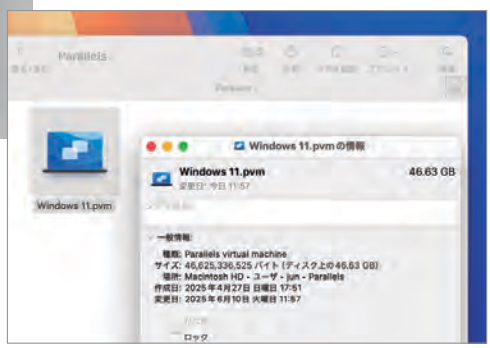
仮想マシンのストレージ容量は自動で設定されるため、通常はユーザが特に意識する必要はありません。しかし、アプリケーションによっては処理の際に大量の一時ファイル（キャッシュファイル）を生成し、容量不足によるエラーを引き起こす可能性があります。

こうした課題に対応する手段として、Parallels Desktopにはストレージ容量を手動で設定する機能が用意されています。

ストレージサイズは、仮想マシン作成後にも変更が可能ですが、容量を減らすことでデータが失われる可能性が高まるため、十分に注意してください。



1 [構成]ウインドウを開き、[ハードウェア]→[ハードディスク]→[詳細]→[プロパティ]とクリックしていくと、この画面が開きます。スライダでストレージ容量を変更できます。

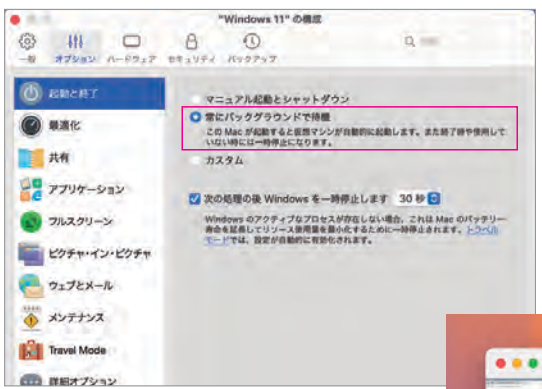


2 仮想マシンは、Finder上では1つのファイルとして表示されます。ストレージサイズを大容量に設定しても、ファイルサイズは実際の使用状況に応じて変化します。

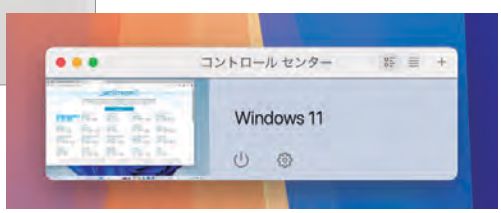
Technique 4 バックグラウンドでWindowsを起動

Parallels Desktopには、仮想マシンの状態を一時停止状態で保存する「サスペンド」機能があります。仮想マシンを一から起動するよりも早く操作を再開できますが、それでもサスペンドからの復帰には数秒～数十秒程度の時間がかかります。

Windowsアプリをより素早く使えるようにしたい場合は、Windowsをバックグラウンドで起動し続ける設定を行うのがオススメです。仮想マシンのウインドウを閉じても、処理を止めずにバックグラウンドで動かせるため、業務の流れを妨げません。Windowsでの作業効率を重視するなら積極的に活用していきましょう。



1 [構成]ウインドウの[オプション]→[起動と終了]には[常にバックグラウンドで待機]という項目があります。これを選ぶと、Windowsのウインドウを閉じてもサスペンド状態にならず、バックグラウンドで起動し続けます。

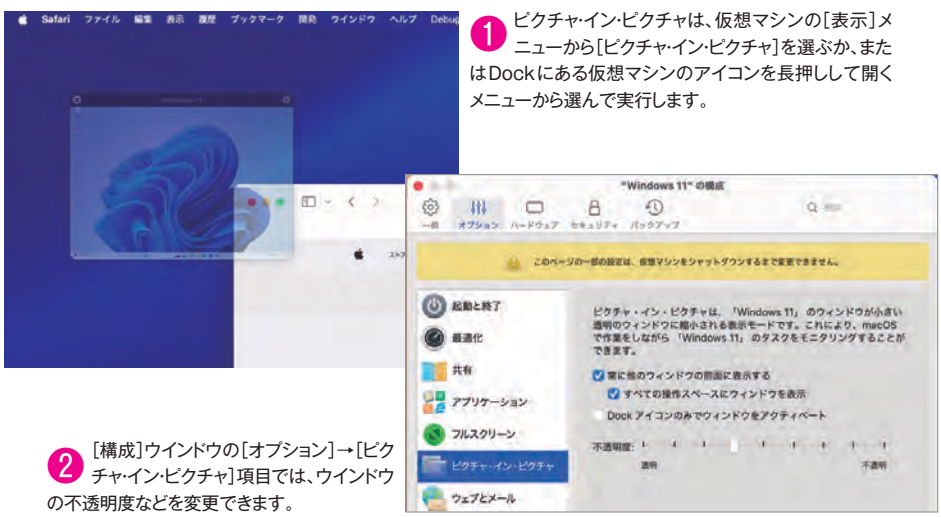


2 Windowsアプリを使いたいときに素早く起ち上げられる便利な機能です。誤ってウインドウを閉じてしまった場合の備えとしても役立ちます。

Technique 5 ピクチャ・イン・ピクチャでWindowsの状況を監視

Parallels Desktopには、仮想マシンの画面を小さなウインドウで常時表示できる「ピクチャ・イン・ピクチャ（PiP）」機能が用意されています。たとえば、Macで資料を作成しながら、Windows側でのインストール状況やタスクの進行状況を確認したい場面に便利です。

PiPは、[表示]メニューやDockのアイコンから簡単に切り替えられます。ウインドウは自由な場所に配置でき、必要に応じて非表示にもできるため、作業の邪魔になりません。マルチタスクが多いビジネスユーザにとって、視認性と効率性を両立する便利な機能です。



1 ピクチャ・イン・ピクチャは、仮想マシンの[表示]メニューから[ピクチャ・イン・ピクチャ]を選ぶか、またはDockにある仮想マシンのアイコンを長押しして開くメニューから選んで実行します。

2 [構成]ウインドウの[オプション]→[ピクチャ・イン・ピクチャ]項目では、ウインドウの不透明度などを変更できます。

Technique 6 状態を過去に巻き戻せるスナップショットとロールバックモード

仮想マシンに限らず、PCでトラブルが発生したとき、「あの設定をする前に戻れたら…」と思ったことはないでしょうか？

Parallels Desktopには、そんなときに役立つ「スナップショット」機能があります。これは、任意の時点での仮想マシンの状態を保存できる機能です。システム設定の変更やアプリのインストールを行う前にスナップショットを作成しておけば、万が一問題が起きた際、トラブルが発生する前の状態に巻き戻すことができます。さらに「SmartGuard」という機能もあり、スナップショットを一定間隔で自動的に保存してくれるためより安心です。

アプリケーションの検証作業などでは、ロールバックモードの活用もオススメです。[ロールバックモードで開始する] を選んでWindowsを起動すると、起動後に行った操作が「一時的なもの」として扱われ、再起動後にはすべて元通りになります。リスクのある作業でも安心して行える機能です。



❶ スナップショットは、[処理] メニューから [スナップショットの作成] から作成します。



❷ [処理] →[スナップショットの管理] からスナップショットの管理ウインドウを表示させると、これまでのスナップショットが一覧表示されます。



❸ 「SmartGuard」は、[構成] ウィンドウを開いて [バックアップ] 項目でオンにします。[詳細] ボタンを押すと、スナップショットの保存間隔や保存しておくスナップショット数を設定できます。

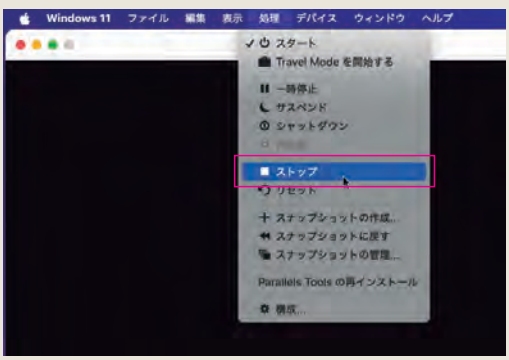
NEXT STEP

仮想マシンが正常に操作できなくなったときの対処法

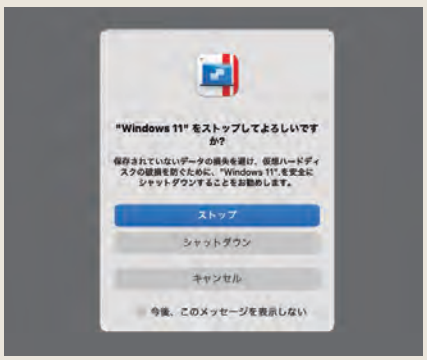
Parallels Desktopを使っていると、まれに仮想マシンの画面が真っ黒になったり、操作を受け付けなくなることがあります。とくにMacがクラッシュしたあとや、急な強制終了の後に発生しやすい症状です。こうした場合は、メニューバーの [処理] → [ストップ] を実行して、一度仮想マシンの動作を停止させることで状況が改善することがあります。

また、Windowsに大規模な更新プログラムが適用された直後にも、キーボード入力が効かない、表示がおかしいといった不具合が起こるケースがあります。このような場合は、同じく [処理] メニューから [Parallels Toolsの再インストール] を選択することで、多くのトラブルが解消します。Parallels Toolsは、仮想マシン内でマウスやキーボード、グラフィックスなどを最適に連携させるための必須コンポーネントです。

仮想マシンの不具合は焦りがちですが、まずはこれらの基本的な対処法を試すことで、落ち着いて復旧に対応できるようになるでしょう。



❶ 長時間待ってもWindowsが起動しない状態に陥った場合、メニューバーの [処理] →[ストップ] を選ぶことで解決することがあります。

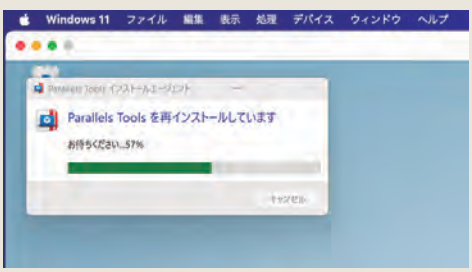


❷ [ストップ] を選ぶと、仮想マシンが強制終了されます。再度起動して状況が改善するか確認しましょう。

❸ Parallels Toolsは、Coherenceや画面サイズの調整機能など、Mac上で快適にWindowsを使うために必須のツールです。新規仮想マシンの作成時には自動でインストールされますが、Windowsで不具合が発生したときには再インストールを試みましょう。



❹ インターネット経由でダウンロードとインストールが行われます。インストールが完了した後に、ユーザが何か設定や操作を行う必要はありません。



Macを選ぶ理由❾ Service

導入・管理・運用に役立つ法人向けソリューションが充実!



ゼロトラスト環境で安全に管理・運用できる

ゼロタッチ展開が可能

アップルは、IT管理者がMacを企業で導入しやすいようにさまざまなソリューションを展開しています。まずMacを社内へ配備して管理・運用する際に欠かせないのが「アップル・ビジネス・マネージャ（Apple Business Manager：ABM）」です。これはサードパーティのモバイルデバイス管理ソリューション（MDM）と連係する、IT管理者向けの無料のポータルサイト。アップルの承認を経て登録が完了すると、Macの企業導入に役立つさまざまな機能を利用できます。

たとえば「自動デバイス登録」（ADE：Automated Device Enrollment）を利用すれば、MacのMDMへの登録を自動化でき、ユーザの手元に届く前にMacに触れたり事前設定したりすることなく、キッティングが可能です。そしてデバイス購入後は箱のままユーザに配付できる、いわゆる「ゼロタッチ展開」を実現できます。

この自動デバイス登録は、アップルやアップル正規販売店、通信事業者から新規に購入したデバイスのみならず、組織内にある既存のMacにも対応しています。アップルが無料で公開するiOS向け「アップル・コンフィギュレータ（Apple Configurator）」を利用すればアップルシリコンやアップルT2セキュリティチップを搭載したMacをABMに登録できます。

組織向けアカウントの作成

また、ABMではアップストアで販売されているアプリなどのコンテンツを一括購入できる「VPP（Volume Purchase Program）」も利用可能。MDMと連係させることで、入手したコンテンツをワイヤレスでインストール、アップデート、回収、再配付できます。アップルアカウント（Apple Account：（旧アップルID）を台数分取得する必要はありません。

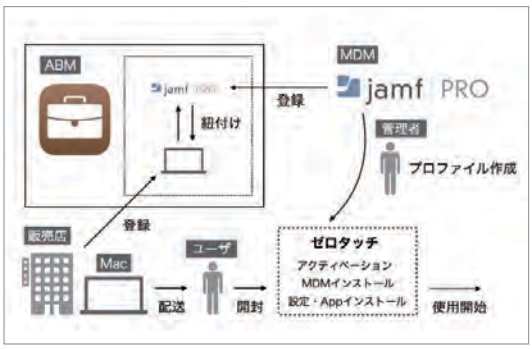
さらに、ABMでは「管理対象アップル・アカウント」も利用できます。MacでiPhoneやiPadとの連係機能を利用したり、純正ソフトで「共同作業」の機能を利用したりするにはアップル・アカウントが必要ですが、個人用のアップル・アカウントを利用するとIT管理者の把握が難しくなり、MDMの



はじめてMacを含むApple製品を企業導入する際は、Appleがオンラインで公開している「Appleプラットフォーム導入ガイド」が役立ちます。
https://support.apple.com/ja-jp/guide/deployment/



法人向けのABMを利用すると、Apple製品のMDM登録を自動化して購入後のセットアップを自動化できるADEや、アプリやコンテンツのライセンスの一括購入が行えるVPP、組織向けのApple Accountである管理対象Apple Accountsの作成やアカウント管理が利用できます。
https://business.apple.com



Apple ConfiguatorのMac版では、構成プロファイルの作成や配付、アプリの配信、監視モードの有効化、OSのアップデートや初期化、デバイス名や壁紙の変更等が行えます。また、iPhone版では、iPhoneやiPad、AppleシリコンやApple T2セキュリティチップ搭載のMacをABMに追加できます。

ABMとMDMを連係させれば、Macのゼロタッチ展開（WindowsのAutopilot相当の機能）を実現できます。従業員がデバイスの初期セットアップを開始すると自動でMDMの管理下に入り、自社の設定や利用アプリが反映された状態で使い始めることができます。



制限がない場合は各自が自由にアプリをインストールできてしまいます。

「管理対象アップル・アカウント」を利用すればIT管理者がABMを利用して人数分作成でき、組織で所有・管理することが可能に。アカウントの割り当て確認や編集、削除、ロックの解除、パスワードリセットなども行えるようになります。「マイクロソフト・エントラID（Microsoft Entra ID）」や「グーグル・ワークスペース（Google Workspace）、対応IdPと連係して作成すれば、それらのアカウントでアップルのサービスにログインして利用することもできます。

Macの管理にはジャムフ

アップルはABMを通じてIT管理者をサポートするさまざまな機能を提供していますが、ADEやVPP、管理対象アップル・アカウントを利用するには、Macに組み込まれたアップルのMDMフレームワークに対応するMDMを導入していることが前提です。

多数の対応製品がリリースされる中、もっとも定評があるのは、アップル・ファーストを掲げ、2002年創業時から20年以上に渡りアップル製品向けの管理ソリューションを提供するジャムフ社の「ジャムフ・プロ（Jamf Pro）」です。その大きな特徴は、構成プロファイル（パスコードやWi-Fi、セキュリティポリシーなどの各種設定）の作成や配付、アプリの自動インストールやライセンス管理、デバイスへのコマンド送信（リモートロックやワイプ、パスコード消去など）、デバイス情報（OSのバージョンやセキュリティポリシーの適用状況など）の収集などアップルのMDMフレームワークに基づいた各種機能だけでなく、ジャムフ社独自のフレームワークによる便利機能を備えること。ABMや自動デバイス登録、VPPなどアップルが提供する最新機能への素早い対応や、アップルの最新OSに10年以上連続で同日対応を果たしている点も大きな魅力です。そのため、たとえウィンドウズとMacの混在環境においても汎用的なMDMではなく、「Macの管理にはジャムフ」とこだわって採用する企業が国内でも後を絶ちません。

また、ジャムフ社はマルウェア対策や振る舞い検知、セキュリティイベントログの収集、コンプライアンス維持などが可能な「ジャムフ・プロテクト（Jamf Protect）」、ゼロトラストネットワークアクセスやクラウドIdPと連係したMacのアカウント管理を行える「ジャムフ・コネクト（Jamf Connect）」も展開しています。エンドポイントデバイスに対するセキュリティ要件が年々高まり、MDM単体では情報セキュリティの担保に限界がある中で、これらのソリューションをジャムフ・プロと組み併せて利用すればMacの包括的なセキュリティ対策を実現できます。Mac向けにジャムフ・プロとジャムフ・プロテクト、ジャムフ・コネクトをパッケージ化した「Jamf for Mac」が2025年3月からリリースされており、この単一ソリューションを導入すればよりシンプルに環境構築が可能です。

なお、「macOSセキュリティ・コンプライアンス・プロジェクト（mSCP）」をベースに開発された「ジャムフ・コンプライアンス・エディター（Jamf Compliance Editor）」もジャムフ社は展開しています。この無料アプリを利用すると、mSCPで公開されているセキュリティフレームワークに準拠した独自のセキュリティガイドラインをGUIで作成可能。それをジャムフ・プロへアップロードすれば簡単にデバイスに適用できるほか、ジャムフ・プロまたはジャムフ・プロテクトを使ってコンプライアンスへの準拠状態を常に監視することができます。

心強い販売パートナー

このように現在は企業にMacを導入するうえで必要



URL https://support.apple.com/ja-jp/guide/certifications/apc322685bb2/web

mSCPは、企業のセキュリティガイドラインを作成するのに役立つオープンソースの取り組み。アメリカ国立標準技術研究所（NIST）、アメリカ航空宇宙局（NASA）、CISベンチマークなどのフレームワークがGithub上で公開されており、IT担当者は独自にカスタマイズして自社のガイドラインを作成できます。Macに不慣れなIT担当者でも、セキュリティポリシーに準拠したうえで安全にMacを導入でき、OSのバージョンアップ時などにも手間をかけることなく、セキュリティガイドラインを適用し続けられます。



URL https://trusted.jamf.com/docs/establishing-compliance-baselines

MacはOS・デバイスレベルのセキュリティが万全ですが、組織運用においてはその可視化が欠かせません。セキュリティポリシーのベースとなるガイドラインはJamf Compliance EditorやmSCPを利用して作成し、Jamf Proで配付。そしてさらにJamf Protectを利用すればコンプライアンスの準拠状態の確認や、macOS内蔵のセキュリティフレームワークの可視化なども可能になります。

なソリューションはすべて揃っています。デバイスのキッティング（セットアップ作業）やMDM構築の支援、デバイスを安心して使い続けるための保証&保守サービスなども多数提供されています。

とはいえ、これまでMacを導入したことのない企業にとっては購入前の「準備」（導入目的や活用方法、調達方法、端末選定、コスト算出、管理方針策定、ネットワーク等の環境調査）や、「検証（PoC）」面に不安に感じるかもしれません。

アップルはそうした企業に対応するために、アップル製品に関する高い技術力と実績を持ち、製品導入やシステム構築、ソリューションを提供できる企業を「アップルVAR（Apple Value Added Reseller）」として認定しています。また、国内では展開されていない「アップル・プロフェッショナル・サービス（Apple Professional Services）」に準じた内容のPoCサポートサービスを提供しているところもあります。導入に不安を抱える場合は、こうした企業にサポートをお願いすることでより安心してMacを導入できるでしょう。



Appleは企業のMac導入をサポートするために、システム構築・ソリューションを提供できるパートナーをApple VAR（Value Added Reseller）として認定しています。

URL https://www.apple.com/jp/business/contact/var/all.html



Appleは法人向けにより手厚いサポートを提供する「AppleCare Professional Support」も用意しています。組織単位での加入が前提となる「AppleCare OS Support」や、200台以上のAppleデバイスを導入している中規模から大規模の法人・教育機関には、「AppleCare for Enterprise」などがあります。

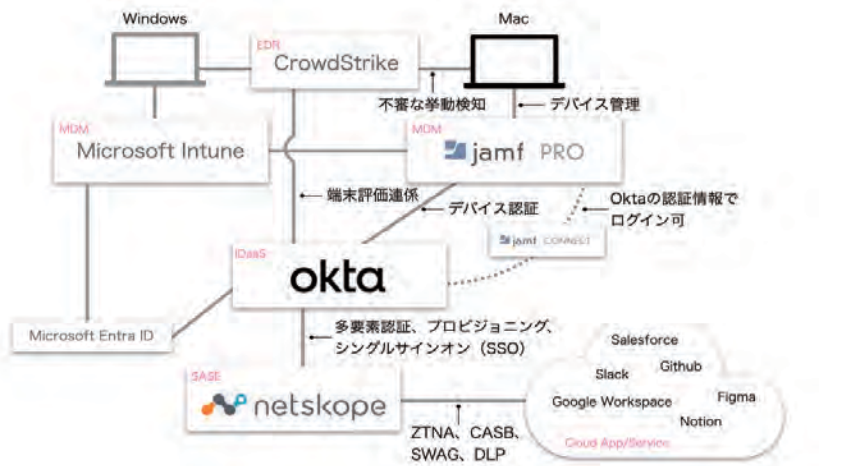
URL https://www.apple.com/jp/support/professional/



Macも「ゼロトラスト」でセキュアに業務利用できる!

一昔前までの企業のセキュリティモデルは、社内（内側）のネットワークとインターネットを分離してその境界線上でセキュリティ対策を講じるモデルが一般的でした。しかし、今日ではクラウド化やリモートワークの浸透によるセキュリティリスクの高まりに対応するため、ネットワークの内側／外側を区別することなく、会社の情報資産やシステムにアクセスするすべてのものを信用せずに正当性や安全性を検証する「ゼロトラスト」モデルへのシフトが進んでいます。そのため、Macを導入する企業においてはWindows同様にゼロトラストを担保できるかが大きな関心事になりますが、Mac向けにはしっかりとしたゼロトラスト関連のソリューションが揃っています。

まずID統制＆アカウント認証に関しては、「Okta Workforce Identity Cloud」や「Microsoft Entra ID」など、いわゆるIDaaSによって認証情報を一元管理し、SSO（シングルサインオン）やMFA（多要素認証）、アクセスコントロールなどを行うことが可能。これにより正しく認証され、管理者の許可を得たユーザのみが重要な情報へアクセスできるようになります。



MacとWindows PCの混在環境におけるゼロトラスト構築モデルの概略（一例）です。ほかにもゼロトラストを構成する要素はありますし、どのような構成にするのか、またどのソリューションを導入するのかは企業によって異なるものの、Macはゼロトラスト環境下においてセキュアに管理・運用することができます。なお、Macにログインする際は、ID&パスワードまたは生体認証（Touch ID）のどちらかがデフォルトですが、Jamf Connectを使えば、Microsoft 365などのアカウントを使ってMacのログインに二要素認証を利用できます。

また、デバイス管理&デバイス保護に関しては、前述した「Jamf Pro」をはじめとする多数のMDMがMac向けにも展開されています。MDMをIDaaSと連係させれば、組織での利用が許可された安全なデバイスからのアクセスだけを許可する「デバイス認証」も可能です。「CrowdStrike」などのEDR（EPP）製品によってエンドポイントを監視して端末評価を行い、IDaaSと連係してデバイスポスチャによるアクセスコントロールを行うこともできます。

そしてネットワークセキュリティやクラウドセキュリティに関しては、ZTNA、CASB、FWaaS、SWAG、SD-WANといった機能を統合して提供する「Netskope」や「Zscaler」などのSASEソリューションがMac向けにも展開されているほか、Jamf社のように1社でそのための包括的なソリューションを提供しているケースもあります。

Macを選ぶ理由⑩ AI

Apple Intelligenceでさらなる業務の効率化が図れる。

無料で使えるから入門用AIツールにもぴったり

自然に使えるAI

業務効率化や生産性向上、ミス軽減、人材不足解消などを目的にビジネスにAIを活用する動きが急速に広がっています。しかし、会社全体に浸透させることの難しさや利活用促進に課題を抱えているIT担当者も多いでしょう。そうした中で、Mac導入企業に大きなメリットをもたらすのが、2025年3月末から日本語環境でも利用可能になった「アップル・インテリジェンス」です。

このアップルのAI機能はmacOSに統合され、メールやメモ、サファリ（Safari）、ページズ（Pages）などのアップル純正アプリのほか、ワードやエクセル、パワーポイントなど普段利用するアプリで「自然に使えること」が大きな特徴です。ビジネス文章を推敲したり、メールやメッセージ、通知を要約したり、メモから録音しながら文字起こししたり、日々のタスクをよりスピーディに行うための手助けをしてくれます。AIを利用するために別のツールを起ち上げたり、難しいプロンプトを入力したりすることなく、AIの力を業務にスムースに活用できます。

安全なデバイス内処理

アップル・インテリジェンスのもう1つの大きな特徴が「安全に利用できること」。特にビジネスでAIを利活用する場合は、入力情報が学習データとして利用されるリスクや従業員が意図せず情報を漏えいするリスクなどが懸念されますが、アップル・インテリジェンスはできる限りの処理をオンデバイスで実行します。また、より多くの処理能力を必要とするリクエストは「プライベート・クラウド・コンピュート（Private Cloud Compute）」で処理され、このサーバはアップルシリコンで動作し、高度なクラウドセキュリティを担保します。ユーザのデータはアップルが保存・共有せず、ユーザのリクエストに応えるためにのみ使われます。

そしてもう1つ、アップルインテリジェンスはOSに内蔵されているため追加費用がかからず、「無料で利用できる」点も大きな魅力です。そのため、コストパフォーマンスに優れた生成AIの入門ツールとしても気軽に導入できます。

Apple Intelligenceでできる主なこと

»» 作文ツール
文章の作成や校正、要約、推敲が行えます（他社製アプリを含め文章を入力する場面で利用可能）。

»» 優先通知
届いた通知の中からユーザにとって緊急度の高いものを要約して表示してくれます。

»» 優先メッセージ
「メール」アプリで緊急メッセージを受信ボックスの上部に表示します。

»» スマートリプライ
「メール」や「メッセージ」アプリに届いたメッセージの回答の候補を提示し、数回クリックするだけで素早く返信メッセージを作成できます。

»» 音声の録音と文字起こし
「メモ」アプリなどで録音した内容の自動で文字起こし。要点やタスクリストの作成などが簡単に行えます。会議の場で大活躍する機能です。

»» 画像生成
「Image Playground」アプリを利用して画像を生成。「メッセージ」や「フリーボード」などでもImage Playgroundを利用できます。

Apple Intelligenceで現時点で利用可能な主な機能。このほかにも「写真」アプリで画像から邪魔なオブジェクトを削除したり、「ジェン文字」と呼ばれるカスタム絵文字を作成することも可能。今後も多くの機能が追加されます。



Apple Intelligenceは 使い慣れたアプリからメニュー操作で簡単に利用できます。直感的で使いやすく、製品体験に深く結びついていて、ユーザが重要と感じることをパワフルにサポートしてくれる。まさにユーザを第一に考えるAppleらしいアプローチです。利用には、macOS Sequoia 15.4以降を搭載した、M1以降のMacが必要です。



Apple Intelligence自体の利用は制限できませんが、Jamf Proなどの対応MDMを利用すれば機能ごとにコントロールできます。
https://www.youtube.com/watch?v=FAyjJl9S3kI



Siriや作文ツールからChatGPTを利用することも可能です（ChatGPTへのアクセスは無料で、アカウントの作成も不要）。ChatGPTのアカウントにサインインせずに利用する場合は、ユーザのIPアドレスが匿名化されるほか、OpenAI社はリクエストを保持したり、AIモデルのトレーニングに使用したりしません。

INTERVIEW

ゼロタッチ導入で全社Mac化を実現！ ソフトバンクロボティクスのIT環境整備術

「Pepper」をはじめとする業務用ロボットの企画・販売・運用を手がけるソフトバンクロボティクス株式会社では、2021年から業務端末として本格的にMacを導入。MDMを活用したゼロタッチ導入を実現し、グローバル全体での管理体制を効率化しています。Mac導入の背景と展開のプロセス、Windows PCとの併用について、プロダクト統括 技術本部の渡邉邦尚さんに伺いました。

全社員にMacを一括展開

MF●まず、Mac導入前の社内PC環境について教えてください。

渡邉●以前は、ウィンドウズとMacが混在するCYOD（Choose Your Own Device）型の環境でした。2021年にMDMツール「ジャムフ（Jamf）」を導入したことをきっかけに、アップル製品の一括管理による運用体制を整えました。現在では、グローバル全体で約800台のMacが稼働しており、ウィンドウズPCは約100～150台程度。全社員の8割以上がMacを利用しています。

MF●Mac一括導入に踏み切った背景には、どのような課題があったのでしょうか？

渡邉●以前のウィンドウズ環境では、1台あたりの手動キッティングに約4時間もかかっていたことに加え、海外拠点の拡大に伴い、セキュリティポリシーの統一や運用コストの最適化が大きな課題となっていました。ジャムフによるゼロタッチ導入によって、macOSのパフォーマンスを最大限に活かしながら、社内ヘルプデスクの負担軽減も実現できました。

MF●現在のMac端末のスペックについても教えていただけますか？

渡邉●現在は、メモリ16GBを搭載したMacBookエアを基本モデルとしています。ストレージはこれまで256GBが標準でしたが、今後導入予定のモデルからは、M4チップ搭載、512GBのストレージに切り替わる予定です。また、業務内容によって高スペックな端末が必要な社員については、個別申請のうえ上位モデルを支給しています。

MF●Macで利用する業務アプリの一例を教えてください。



ソフトバンクロボティクス株式会社
プロダクト統括 技術本部 技術戦略統括部 技術企画室 室長 渡邉邦尚さん



ソフトバンクロボティクス株式会社

ソフトバンクロボティクス株式会社は、2014年にいち早く人型ロボット「Pepper」を発表し、2021年に配膳・運搬ロボット、2022年に物流自動化ソリューションの展開を開始しています。これまでの多様な製品の取り扱いを通じて得た知見や稼働データを活かし、ロボットインテグレーター（RI）として先駆的な役割を果たしています。現在、世界9カ国に21の拠点を構え、グローバルでも製品を展開し、人とロボットが共生する社会に向けて邁進していきます。

URL https://www.softbankrobotics.com/jp/

渡邉●主に「マイクロソフト365（Microsoft 365）」を利用しており、開発チームでは「ブイエスコード（VSCode：Visual Studio Code）」を使用するケースもあります。ほかには、「ノーション（Notion）」などのナレッジ共有ツールも活用しています。

MF●そのほか、ユーティリティツールなどの導入状況はいかがでしょうか？



MDMを経由したゼロタッチキッティングにより、Macの全社展開をスムースに実現しました。Macならではの速い起動やバッテリ持続性などが従業員から好評です。

渡邉●必要最低限のツールはキッティングの段階でインストールしていますが、ジャムフのセルフサービス機能を使って、社員が必要なツールを自分でインストールできるようにしています。また、セキュリティ部門と連携して、禁止アプリを事前に定義しており、不正なアプリが検出された場合は遠隔で削除を行っています。

MF●Mac導入にあたって、社員への教育やサポート体制はどのように整備されましたか？



「Parallels Desktop」の導入で、一部の業務で必要なWindows向けアプリも効率的に利用できる環境が整いました。

渡邉●導入初期には「Macの操作が不安」という声もありましたので、Macの基本操作や社内アプリの使用方法をまとめたガイドを配付し、オリエンテーションも実施しました。加えて、社内問い合わせ対応の負担軽減を目的として、よくある質問をまとめたセルフサービス型のナレッジベースを整備しています。

MF●導入後の社員の反応はいかがでしたか？

渡邉●導入当初は多少戸惑いの声もありましたが、すぐに「起動が速い」「バッテリが長持ちする」など、Macの利便性を評価する声が増えていきました。今では「もうウィンドウズには戻れない」と言う社員も多くなっています。

ウィンドウズ環境も確保

MF●業務によってはウィンドウズアプリの使用も必要かと思いますが、どのように対応されていますか？

渡邉●会計管理やロボット制御など、一部の業務ではウィンドウズアプリが必須です。そのため、仮想化ソフトの「パラレルス・デスクトップ（Parallels Desktop for Mac）」を導入し、Arm版ウィンドウズを仮想環境として利用しています。従来は別の仮想化ソリューションを使っていたのですが、セキュリティやパフォーマンスの観点からパラレルスへと移行した経緯があります。

MF●仮想環境の管理はどのようにされていますか？

渡邉●パラレルス上のウィンドウズ環境は「マイクロソフト・インチューン（Microsoft Intune）」で一括管理しています。物理的なウィンドウズ端末と同じセキュリティポリシーを適用できるため、社内運用ルールを統一できる点が大きなメリットです。

MF●セキュリティ面での工夫があれば教えてください。

渡邉●アップル製品はMDMソリューションとの組み合わせにより柔軟な制御が可能です。弊社でも社内セキュリティチームと協力し、常に最新のOSバージョンを対象としたセキュリティポリシーを定義し、全管理端末へ配付・監視を行うことで社内セキュリティの向上に取り組んでいます。

MF●管理者視点でMac導入のメリットは何でしょう。

渡邉●Macは初期構成やリモート管理の柔軟性が非常に高く、設定の一括配信やゼロタッチ展開などがしやすい点が魅力です。ウィンドウズでもできることはありますが、Macはよりシンプルかつ強力に実現できますので、セキュリティを保ちつつ管理工数をかけたくない企業には特におすすめです。

MF●今後のMac活用や運用体制の展望についてお聞かせください。

渡邉●今後は、ユーザからの問い合わせ対応の自動化や、アップル・インテリジェンス（Apple Intelligence）の活用にも注目しています。また、Macとiphoneを軸にしたゼロトラスト環境の強化にも引き続き取り組んでいく予定です。

Parallels®

Microsoft 社
認定ソリューション

パラレルス デスクトップ

Parallels® Desktop for Mac Business Edition

Windows を Mac で実行

再起動せずに複数 OS を同時利用

以前の macOS や Linux も使えて複数台持ちを解消



Mac はクリエイター用、業務は Windows PC だよ、
との声を耳にして来ました。
仮想化は遅くて使いものにならなかった、
との声もありました。
それでも私たちは諦めませんでした。
Mac 1 台で、あらゆる OS とアプリケーションを
自由自在に使えたら、多くの人たちの
やりたいことが実現でき、笑顔にできるから。

目指すところはいつも使いやすさと快適な操作性。
そして、企業の業務に求められる安定性や
安心・安全の追求。
私たちの挑戦と情熱は、この先も Mac とともに。

最新の Apple® M シリーズ搭載 Mac® にも対応
詳細は parallels.com/jp/business にてご確認ください

業務に応える機動力と生産性を Mac で実現。

◎ 最新の Windows® 11 や Windows アプリケーションを Mac® 上で同時に、かつシームレスに利用可能
◎ 最新の macOS® に最適化し、macOS に沿った UI デザインとルック アンド フィールを実現
◎ Windows 仮想マシンへのサインインに Touch ID® を統合、Mac から Windows 仮想マシンの分離も可能
◎ 用途に応じたパフォーマンス設定で、多くの Windows グラフィック ツール等も Mac 上で快適に動作
◎ 企業や教育機関に適したセキュリティ面の強化、ライセンス管理を専用ポータル上で容易に実施
◎ シングル サインオン (SSO) ユーザーの各仮想マシンを一元管理可能な「Enterprise Edition」もご用意

まずは無償トライアルで快適な操作性をご体験ください。

https://www.parallels.com/jp/products/business

コーレル株式会社

〒108-0075 東京都港区港南 2-16-5 NBF 品川タワー 6F
購入前のご相談窓口: cpa-sales-jp@parallels.com

お問い合わせ:

© 2025 Parallels International GmbH. All rights reserved. Parallels および Parallels ロゴは、カナダ、米国および / またはその他の国や地域における、Parallels International GmbH の商標または登録商標です。本文書に記載されるその他すべての社名、製品およびサービス名、ロゴ、ブランド、登録 / 未登録商標は、識別のみを目的としており、その所有権は各社にあります。

CJ-2507PDB-01-1000